

心理臨床の道

田 畑 治

第 I 部 心理臨床への歩み

—大学・学部から大学院時代までを語る—

1. 大学・学部時代

(昭和33年4月～昭和37年3月まで)

1 教養部時代

①劣等感に悩まされる：生まれ育った山口県の片田舎から、京大に現役で入学したが、同級生に浪人後に入学した者が多く、みんな大人に見えて劣等感に悩まされた。学部の中に現役で入学したものは数名と少なく、たいいてい地方から出てきた者で、すぐに見て分かった。皆イガグリ頭をしており、私を含めて坊ちゃん坊ちゃんしていた。一学年一クラスのみで構成で50名であり、学生定員数からしてもマイノリティであり、弱小学部であった。

また当時、永井道雄先生（京大から東工大へ転出、後に文部大臣を歴任）の「でも、しか教師」論で、先輩連中は萎縮していた。先輩の一人は、「教育学部はあまりパツとしない」と言っていた。

仲間は全国各地—北は北海道、青森、南は九州・鹿児島、米国統治下の沖縄—から来ていたので、方言混じりの会話は何とも可笑しかった。近畿地方出身者は多かったが、京都、大阪、奈良と滋賀でも言葉が違い、関西弁にはなかなか慣れなかった。

私が生まれた山口県光市出身で、私の父方の従姉妹と同一高校出身者で現役入学の松谷哲男君（経済学部：卒業後民間企業に就職）と一緒によく行動した。彼は小学1年入学前に崖から転落した事故による怪我が元で腕に障害を持っていたが、お互いに遠慮なく自然に往き来したりした。

②宇治分校での教養課程1年：宇治分校は、三高寮歌に歌われている吉田山の麓の、時計台のある京大のイメージとは違って、宇治川沿い宇治・五ヶ庄地区にあり、大学のキャンパスとは程遠いモルタル作りの2階建てやレンガ作りの旧火薬庫跡を転用した教室があった程度である。火薬を保管するには、湿地帯が適しているとかで、

レンガが積み上げてある教室であった。また金網のフェンス一つ隔てて、陸上自衛隊・宇治駐屯部隊と隣合わせであった。野蛮にも自衛隊員が藁人形に鉄拳で突く練習をしているのを見たことがある。“反戦と自由”を伝統とする京大にはおおよそ似つかわしくなかった。構内には小川が流れており、アメリカ・ザリガニが生息していた。長閑と言えば確かにそうである。昼休みなど、生物学の久米直之先生の指導の元で、正調・琵琶湖周航の歌を教わったりした。久米先生には生物学の試験結果の評価の記入もれをされ、修正してもらった思い出がある。

下宿は、先輩の世話で、宇治・岡屋の農家の2階に間借りしていた。その家の主人は自衛隊にパートで雇われていたが、我々は時々憲法論争を吹き掛けていた。主人が晩酌をした際には議論が伯仲していた。また、かの経済学部の友人松谷君も比較的近くに間借りしていて、一緒によく食事やダベリングをした。我々が大学に入学した頃はまだ米が自由販売されていなくて、米穀通帳を田舎から転居とともに持参して、大学生協に預けておいた。朝夕に生協の食堂を利用していたが、朝は素うどんか、きつねうどん、昼はカレーライスか一品付きの定食、夕食は二品付きの定食という程度であった。夕方、下宿から構内の生協の食堂に1km歩いて食べに行き、帰ってきたらまたお腹が空いた感じであった。メニューの数も少なく“粗食の時代”であった。下宿では、友達と集まり、ダベルくらいしかなく、近くには黄檗宗本山の万福寺があり、静かな境内を下駄を突っ掛けて精々散歩していた程度である。あるいは日曜日には、宇治の平等院近くに下宿していた同学部の内藤豊君（教育社会学コース：卒業後マスコミ社に就職）と共にESSクラブに所属していたので、一日中英語で対話をすることを決めてつき合っていた。

他にすることがなかったから、授業には、まじめに出た方である。一般教養科目の教育学で鱈坂二夫教授は印象に残っている。先生は鹿児島男児の意気込みで、人間における“愛”“アガペー”を熱っぽく説かれた。“おっかさん”という独特の言い回しにうっとりした。また京大のドイツ語三羽ガラスの一人と言われていた古松貞

一教授のドイツ語購読で取り上げあげられたA. シュバイツァー博士の『Zwissen Urwald und Wasser – Aus meiner Kindheit und Jugendzeit』は宇治分校のジャングルのような環境とよくマッチしていたし、本稿の“語り”のヒントにもなっている。

学部1回生の暮れ頃から年始めにかけて、京都大学本部構内にある教育学部教育社会学研究室（重松俊明教授）から大学院の先輩が来て、京都市における『非行少年の社会学的調査』の資料収集のためのフィールドワークへの参加募集があった。これは、かつて非行をした少年たちの家庭を男女二人一組で訪問して、面接調査を行うものである。結果的にはこれに参加したのであるが、研究の仕方・理論的な枠組みの立て方、研究を進める上での態度など、貴重な経験をすることができた。さらにおまけであるが、これが本当の貴重な収穫であったかも知れない。男女がペアーを組んでの訪問調査で、落ち合う場所を決めて、待ち合わせる瞬間は、何かデートのようでワクワクドキドキしたことを思い出す。

③吉田分校での教養課程2年：2回生になると、教養課程のほかに専門課程の概論講義も入ってきた。教育学部はこの頃はA～Eの5大コースに分かれており、私は大学に入学するときからCコース（＝教育心理学コース）を選択したい、と願っていた。A：教育学、B：教育課程、C：教育心理学、D：教育社会学（図書館学を含む）、E：教育行政学などが開講された。教授陣は著名な教授達であったが、教授の中には、教育哲学の高坂正顕教授や西洋教育史の篠原陽二教授のように講義ノートを読み上げるのみの先生もいて、こちらはライティング・マシーンならぬ速記者の感じで書き取っていた。日記：「（1文略）篠原先生の講義はノートを読まれる。それをこちらが速記するのだ。考えながら書くこともできないことはないが、あまりよくない。大学ノートはもう一冊に満ちた。一日一回2時間に1～3枚、つまり4～6ページも進んでその調子だから、これから後まだまだ苦難は多しである。今、ルネッサンス期を過ぎたところである。内容は高校の歴史を一段深めたくらいだろうかと思うが、どうも冗長な気がしてならぬ。去年は、友人の話によると、「二十人くらいいて、最後まで講義に出たのは五人くらいで、そのうち試験になったらゼロ人になった」というから、いかに退屈かがわかる。話の真偽は別として、普通の講義ではないことは確かである。」（11/6（金）（晴））

サボっていた学生は、後でアルバイト学生の製作の海賊版が出回り、それを携えて期末試験を受けていた者もいた。

教授の講義で印象に残っているのは、下程勇吉教授の

教育的人間学の名講義であった。先生は、人間の逆説的二重性、二律背反の生き方を取り上げられた。講義に熱が入ると、講義室最前列の学生には唾が飛んでくるくらい熱の入れようであった。また心理主義への痛烈な批判をされて、ソローキン（社会学者）の提唱した“ビューロクラシー”に準えて、“テストクラシー”と呼んで、胸のすくような講義をされた。私は、いつの間にか、この教育的人間学の考え方を、自分の臨床心理学のベースに置くようになっていた。先生のいう「人間が人間を人間にまで高める」という命題は、とても新鮮であった。

教育心理学概論は、複数教官からなるオムニバス方式で学んだ。確か教職科目の教育心理学科目を兼ねていたと思うが、正木正教授を筆頭に、荻阪良二、梅本堯夫、高瀬常男の3助教授による講義を引き続いて聴いた。正木先生の講義は独特な金切り声で、一度聴いたら忘れられない響きをもっている。先生は、健康が優れず、弱々しい足取りや動きが気になっていた。しかし、真摯な講義は、我々の心を打つものがあつた。

この正木先生が肺壞疽（はいえそ）という病気で亡くなられた。先生の訃報に接したのは、郷里山口の実家に帰っていた時期であり、そろそろ京都に戻る準備をしようとしていた頃である。

この時期の日記に、つぎのような記述がある。

「人間沙汰のなかでただ一つ悲劇がある。それは死である。こういうふうな意に、漱石は『虞美人草』の中で言っている。

今日の新聞でびっくりした。我々の学部の逸材であられた正木正教授がかねてから肺の病気で休養されていたが、自分は新聞を見てびっくりした。これほど自分を落胆させたことはない。肉親に次いで今の自分に大切な、しかも将来心理学を専攻すれば早速不自由は目に見えている。しかし正木先生は物故された。いくら残念がっても取り返しがつかぬ。人間の死ほど我々をして、落胆させるものはあるまい。学部での四大著名人の一人に数えられた正木先生の御冥福を祈って一学徒の追悼をする。我々は先生の遺志を継がなければならぬ。日本のために。」（昭和34年/9/4（金）（晴））

「自分は、正木正先生のことについて、かくの如きを思わざるを得ない。先生がかつて夏休み前まで講義された中で、はっきり思い浮かべることのできることばがある。それは「真の謙遜は青年期においてはありえない。K. ヒルティの『眠られぬ夜のために』という書物において、真の謙遜は神に通じねばならぬという理由はそこにある」と何度か云われたのが耳の底にある。非常に含蓄のある言葉である。先生こそ、謙遜に生きられた人間である。

ある夏休み前の日、自分は正木先生が、北の空のほうを見上げられていた。手にはステッキをもたれ、よろよろの姿のようであった。この姿こそ、先生が自分の眼に映った最後の像であったのだ。」(9/14(月)(晴))

その後、日記に「Wenn wir traurig sind, so ist immer das “Ich” mitschuldig daran. Jede Abnahme des Ich erhöht die geistige Kraft. K. ヒルティの「幸福に生きよ」(『幸福論』)の中に、右のような文句がある。私は、近ごろつくづくこのヒルティに共鳴を感じている。さびしくなったり、悲しくなったりするとすぐ逃避してしまう。ヒルティの幸福の最も極みにあるものは神にすぎることである。(以下略)」(11/9(月)(晴))という記述がある。

また、暮れの日記に「≪父が、広島に出てボーナスで『教育心理学事典』(金子書房)を買ってくれたことで、その教育熱心さに心温まる思いが記述されている後で≫：それにしても、つい突然とわびしくなって身体を悶えつつ迫る寒気は、正木先生の今は亡き姿である。自分はよく考えてみると、先生との出会いには一生を左右するものであるとも思っているが、何かにつけても最後のより所となるのは、たとえ不十分な活動であろうといえども、先生の姿が見られるのと見られないのとでは大きな違いがある。心理学関係の書の中で、ふと思い出すことは、先生の心をこめての愛の行為であった。幼児の問題には、自らキンダーズを失うことなく語られた。私は、今年を振り返ってみるに、自分の専門にしようと思う学問の世界のもっとも重大な項として、正木先生の死去を挙げざるを得ないと感じる一人である。」(12/16(水)(晴))と記している。

この頃、私は盛んに“喪の作業”をしていて、先生の死から何か学問への志向性を高めていたと考えられる。

④自主活動等：

1 大学祭(11月祭；11/19～11/23)への演劇の出し物：2年生時にクラスで演劇を上演した。11/16の日記によると、寒風を突いて舞台道具を作成すること、授業どころではないこと、誤解を解きながらの協働作業などが記述されている。わがクラスは役者が揃っていた。劇のテーマは、『象の死』(作者は不明)で、監督は阿満利鷹君、助監督は門谷宏君、主演は藤原将人君と松本ミサヲさん、私は音響効果として象の鳴き声を製作する役目をして、京都市立岡崎動物園の飼育係員に取材に出かけた。係員の助言で、結局トランペットの音をテープレコーダーに吹き込んで録音した。それを再生時にテープレコーダーの回転速度を遅くして流すと、象の鳴き声に近いという経験をし、本番でも成功し、喝采を受けた。これはクラス全員で“協働して演じること”の貴重な

経験であった。

2 大学祭への教育心理学教室の公開と心理テスト：これは教育心理コースの有志で、心理テストの公開をしてかなりの人気であった。クラスの仲間とお客さんにY-G性格テストなどを実施して、判定結果を知らせるというものであるが、かなりの受検者があって、収益をあげた。11/21の日記には「ところでもう一つの心配事は、教育心理学教室の公開のため、一般参加者、その多くは親子連れ、男女学生、その他沢山などが来て、自分は先輩がやった昨年のあのさびしげな風景に比べて、今年このにぎやかさは、とてもとても言い様のないほどであるし、又このにぎやかさこそ、我々教育学部生の最も望んだことではなかったろうか。教育といういつも見損なわれがちなのが、文化祭など特に派手なものや催しの特徴なのに、今年こそ、賑やかさは何を物語るか、自分には被検者の多くが単なる好奇心ではなく、自己実現のため、集まって来ていると見る。派手やかさでもなければ、宣伝による効果でもない、まさに己から求めてのものであった。これこそ自己実現の第一歩の道だからだ。」という風に記述し、主催者・監督者の責任意識が出ている。これも今日的に言えば、主催者・実施者の社会への“アカウントビリティ”と“インフォームド・コンセント”の認識が必要である。

3 医学部への潜り聴講：クラスの友人の高原孝朋君(現在：沖縄で針灸開業)と彼と同郷の友人で医学部生関口英雄さん(精神科医、現在日永病院副院長)がいて、朝1限目から医学部に有志で潜り込み、鳩谷龍・助教授(後に三重大学医学部教授)の「精神医学概論」の講義を聴講した。前期は、何とか頑張って聴講したが、後期になって薬理の基礎知識の学習になり、亀の甲の記号(=ベンゼン核)が出てきて我々は挫折してしまった。ここで医学を学ぶものには、身体に効果がある医薬の知識が必要であるということに身に染みて感じた。今日でこそ、教育学部系の大学にも、専任または非常勤で「精神医学概論」ないし「精神病理学概論」が開講されているが、先生に無断で聴講するのは、如何なものかと思う。

しかし、他方でこの友人仲間2名と私とでK.ヤスペルの『精神病理学総論』(上・下巻；岩波書店刊)の訳書を、医学部図書館で借りてきたドイツ語の原書と対応させて、誤訳を見つけることを目標にして読んでいたが、これもあまり長続きしなかった。このころ出版されていた村上仁著『異常心理学』(岩波書店刊)を貪り読んだものである。あれもこれも、自分とよく似ていると感じながら食い入って読んだ。今時にいう“自分探し”の作業をしていたのだろう。多少、異常ということも覗いてみたいという好奇心も手伝ったことでもあろう。

2 学部の専門課程時代

①原書の読書会：学部3年生時代に、新フロイト派のK. Horney女史の原書（Our Inner Conflict; 1960: Routledge & Kegan-Paul: New York）を市内河原町の丸善に行って購入してきて、有志で読書会をもった。何故ホルナイかという、彼女はこの頃京都にやってくる、講演や禅に関する研究をしていたという理由である。原書を、当時学部の事務室事務職員の山岸さんにアルバイトとして頼んで、時間外にタイプ印刷の原稿を作成してもらった。これを謄写印刷して、必要部数作成し、輪読したわけである。今日のように、印刷も簡単ではなかった。この読書会はどういうわけか、あまり長く続かなかった。一度、学部の先生方に読書会でホルナイ、K. を読んでいるということの話したら、「心理学を幅広く勉強し、片寄らないように」と言われた気がする。これも長く続かない動因になったかもしれない。私自身は、その後も丸善に行って、ホルナイのその他の原書（例えば、New Ways in Psychoanalysis; Neurosis and Human Growthなど）を購入して読んだ。現在でも大切に保管している。

この夏—2002年7月—、近藤章久先生 [1999年没] の聴き語りの書『セラピストがいかにかに生きるか—直感と共感—』2002、春秋社刊に出会ったが、その内容にとっても感銘を受けた。同氏は、ニューヨークのホルナイ女史のところに日本人として初めて教育分析を受けに行った人だと理解していたが、それだけでなく東洋の文化（特に禅や作法など）を逆に彼女に伝え、かつ教え導いていることを知って感動した。1989年に在外研究でアメリカに滞在中に、ニューヨークのカレン・ホルナイ研究所を訪ねて、近藤博士のことを尋ねたが、所員は知っている者はいなくて、今昔の感に浸った。ついでながら同氏は、私が高校時代に通った安下庄（あげのしょう）で生まれ、小学5年まで過ごした人である。

②養護施設に実地調査：教育心理学コースは、実験・実習が多くあった。冬休みに「教育心理学課題演習」（高瀬常男助教授担当）の延長線上で、ある研究課題—夜尿、性格と友人関係の関連—を持って、郷里の島末にある情島（なさげじま）というところに一泊二日の実地調査に出かけた。養護施設寮（＝あげぼの寮）は、東野恭彦・父子が自宅を寮に転用して施設にしているもので児童福祉活動のモデルになっているところである。父の仲介で、あらかじめ現地の中学校の校長にも調査資料収集のことで連絡を取っておいて訪ねた。しかしそれらのデータを得たことよりも、その後子供たちと寮内のグラウンドでソフトボールを夢中になってやったことのほうが印象は深かった。さらに往路は島に定期船で出かけ

たが、復路は寮長の指示で子供のリーダーが寮のモーター船を操船して私を対岸まで送り届けてくれた。私は、北風の吹く荒波についてモーター船が元来た方向に折り返すのをずっと見守っていた。もしも寮長との信頼の関係がなければ、船は有らぬ方向に向かったかも知れないのであった。

③教育実習に参加：われわれが在学していた頃は、京大教育学部の学生は全員が教育実習は必須であった。つまり教育学を学ぶ者は学校という現場経験（フィールド・ワーク）を重視したのである。私の実習校は京都市北区鷹ヶ峰にある旭が丘中学で、期間は6/27（月）～7/9（土）までの2週間であった。教育実習の初日は、6月27日（月）（晴）であったが、その日の日記には次のような記述がある。「地理的にみた旭が丘中学は、ものすごくよい。気に入った。北は船山、東に東山連峰・比叡山、南は市内を見下ろす。全く高見の見物とはこのような学校にあることをいう。他方、それと好一對に必然的に問題を持ち、それは地域が総合的であることだ。持ち寄り世帯は学習能率がよくない。知能においてもそうである。先生や人間対人間においてもいえる。校長先生が現代マスコミの悲劇を述べられた。大いに賛成である。我々は、こちらにこそ教育の現場の基礎を見たいのだ。不適応児が必ずといってよいくらい確実にいる。深い人間理解の洞察をもって、全人格的に学ぶことが先決である。」

教育実習はとても良い、忘れられない経験であった。生徒たちの素直さと可愛さ、教生同士の協働、指導の先生方の熱心さなどなどである。教生は他大学（京都府立大学）の女子学生も数名いて、その後も大学祭への招待や合同ハイキングなど交流をした。

実は、とても考えられないことが事実としてあった。それは、この教育実習の2期間の内、実習初日を含めてわずか3日しか記述が“全く無い”ことである。しかも記述があっても極短いものである。

「教育実習日記に全精力で記入している。日記は休み。」（6/28（火））

「生徒と共に生きる毎日。ある生徒すべてを意中に置くと、やすやすと眠れぬ。できる子、できぬ子、みんな心配だ。レポートに全精力をそそぐことには変わらない。明日から三日間は期末試験期間。」（7/3（土））

これ以外は、全く白紙で空白なのである。それほど、教育実習に打ち込んでいたのであろう。教育実習の後で、一種の虚脱感、物事をするのに倦怠感があった。7/13（水）には帰省をするために、教育実習で一緒だった法学部の田村哲男君（四国・今治出身：卒業後、地方公務員に就職；ニックネームを“昆ちゃん”と呼んでいた）

と四国地方を廻って、松山で道後温泉に入って疲れを癒した後、松山港から郷里・大島まで航路船で帰省した。

④卒業論文への取り組み：4回生になり学部時代の大きな課題である卒業論文では、何を研究テーマにするか、悩んだ。指導教官は倉石精一教授と高瀬常男助教授であった。高瀬先生は、正木先生の薫陶を受けておられ、研究を進めるに際して絶えず“問題意識”ということを重視されていた先生で、よく相談に乗ってくださり、指導をしてくださった。結局、私の研究関心である“問題行動”や“人格の適応異常と自己概念の関連性”のうち、前者について取り組むこととなった。卒論のテーマは、「悩みとなる病気等の背景に関する心理学的研究」という一風変わったテーマであった。この内容は、当時流行していた病気の小児マヒを始め、トラホーム、ぜんそく、腹痛；問題行動に夜尿症、吃音、かんしゃく、偏食；精神障害のてんかん、精神薄弱（＝知的障害のこと）など、10個のコンセプトについて、都会（京都市左京区）：田舎（山口県東和町）×児童：親（父・母）：小学校教師＝＜2×3＞（被検者：児童と親は各々N＝約200名；教師は都会のみN＝130）について、心理学研究法でいう“対比較法”（ $10C_2$ ）を用いて、10概念を重度から軽度まで位置づけた。データの処理は夏休み中に朝から晩まで手で数える単純作業を行った。結果は都会と田舎、児童と親との軽重に差異が見られた。これを都会と田舎の文化的な背景や人間関係の濃淡・緊密さの観点から考察した。当時の私は、文化人類学にも興味があった。

この卒論の結果の内容は、主査であった倉石精一教授が、当時文部省科学試験研究費補助金で取り組んでおられた『児童生徒の精神衛生に関する研究』（昭和36年から38年まで：代表者 栗山重信氏—国立東京第一病院院長、財団法人日本学校保健会長）の分担課題「問題のある児童生徒の類型に関する研究」に私を研究協力者として加えてくださり、昭和36年度、昭和37年度の『報告書』（タイプ印刷）の一部に掲載されている。これは私が、“研究するという事”の意義を味わう体験となった。

⑤大学院の授業を受講：これは学部時代の一つの記念すべき勇気ある行動であった。故・正木正教授の後任として、2年前に教養部から教育学部に配置換えされた“大物教授”で人格心理学の佐藤幸治先生の大学院授業「人格心理学研究—東洋心理療法—」があった。佐藤先生の授業は教養部時代にも「心理学」を受講し、当時から“禅”を世界に普及させるのに熱心であった。それで面識もあり受講を承認して下さった。当時の大学院学生は今日ほど多くなくて、割り込むことも可能であったのであろう。ある英文の論文を担当し、報告した際に“private practice”を“個人的実践”と訳したが、

“（専門家の）個人開業”の意味であった。これは苦い経験であるが、大学院の授業に若造の学部学生を受け入れて下さったことは忘れられない経験である。

2. 大学院時代

（昭和37年4月～昭和42年3月まで）

1 修士課程時代（昭和37年4月～昭和39年3月）

この時代の状況は、日本が所得倍増政策のもと、経済界は好況になっていた。同級生の多くは企業等に就職し、大学院に進学した者は、教育心理学コースでは17名中、3名だけであった。

①総長の告辞：希望した大学院進学で、その入学式が行われた。いまでも覚えているが、平澤興（ひらさわこう）総長が式辞で「……諸君は大学院に入ったからには、湯川秀樹先生のようなノーベル賞とまで行かなくても、“学会賞”の一つくらいは取ってもらいたい」旨のことを述べられた。自分は他人事とはいえないと感じた。それから、各研究科の総代が各研究科長の前に進み出て、宣誓名簿に“署名”をする儀式があったが、私はなぜかとても緊張して、書癪になり、篠原・研究科長に「上がってうまく書けないんですが」というと、同科長は温顔で「落ち着いて書いて良いよ」といわれた。スポーツではそれは無いのに、高校時代の英語のレジテーション・テスト以来の“上がり現象”を体験したので記憶に残っている。当日（4/11）の日記には「……。人類への貢献、文化の進展への寄与を説かれる。話は附属図書館の古典展示に移ったが、一字一行が偉人の血と汗の滲み出る苦勞の結果だと聞いて、胸が熱くなるようだった。4Gとはうまい。Geld, Geduld, Geschick, Glückだ。やはり総長は、GeduldとGeschickが大切だといわれる。“情熱をかけて、学のために死すとも可なり”。これが我らの所信だろう。それにしても学歌（♪九重に花ぞ匂える 千年の都にありて……）をオーケストラの伴奏に合わせて歌えばファイトが湧く。」とある。

なお平澤総長のことでは、6月の大学創立記念祝賀会の園遊会が吉田分校のグラウンドで開催された際に、赤ら顔で学生の中に入って頭をなでさせられ、愉快で親近感をもたれる人となりであったことが日記に記述されている。先生は、学生時代に神経衰弱に陥られて、郷里の新潟に帰っておられたことがあったという。それを乗り越えられて今日があるということは考えさせられた。先生は、人格円満で、まるで“良寛和尚”のような風貌であった。もちろん、学問的には解剖学的世界的権威で、学士院賞を受章されたという研究者でもあった。

②大学院特殊講義・演習の開始：大学院になって、講義・研究・購読演習も始まる。この時期の日記には、研

究心、自覚、気が入るなど、かなりのうち込みの姿勢が記述されている。例えば、

「佐藤幸治教授の熱のこもった“行動科学 (behavioral science) の講義があり、昨年に引き続き行われるものであったが、今年は大学院用として、自分なりのテーマをもって臨むことにした。今年は、自分の問題と先生が長年来手がけられている“東洋人性学 (京大を中心に行われているもの)”との統一を目指したい。教育学部としても、今年は「日本人の性格形成の研究」という大テーマを抱えている。この若き青年の月日に、偉大な業績を基礎からつみあげることが一つの使命感になるまで頑張りたい。」(4/16日記)、「新学年の心構えとして、精々研究室への出入りをするのを助手の人から注意される云々。」(4/24日記)、「佐藤教授から現実の問題—戦争防止問題—が語られたのを契機に『戦争と平和の社会心理学』(松山善則訳)を借りてきて読む云々。」(5/3日記)、「高瀬先生のドイツ語購読演習で、かなり細かいところを根掘り葉掘り指摘される云々。」(5/7日記)、「臨床心理学に理論がないとよく言われる。倉石教授もよくそう言われ、大学院の先輩方はどのような受け方をしているのだろうかと自分自身を問ってみることがある云々。」(5/8日記)など、他方で疑問や疲れを覚え始めていることも見られる。

③臨床実習・訓練の開始：大学院進学以降、修士課程の2年間は、明けても暮れても医学部の南にある熊野学舎2階に付設の「心理教育相談室」(昭和29年設立)での訓練や実践が主体になる。この相談室は、これまで正木正教授が創設され、先生亡きあと倉石精一教授が中心で運営されていた。教授会の承認を得て、当時、少ない校費を補填する為に消耗品費として、録音テープ、玩具や心理テスト用紙の購入に充当する費用を200円程度徴収していた。この時期には、今と違ってクライアントの面接に際し了解を得て録音し、かつそれを逐語記録にし、それをケース会議で綿密に検討してもらうことを特徴としていた。大学院学生は精々6、7名であり、ケース・カンファレンスや研究会でのレポーターの順番の巡りも早かった。明けても暮れても面接後に逐語記録作りに精を出していた。夕方には手に蝋ができていた程である。

「(前文略—飛び石連休への言及)生まれて初めてという少々大きさであるが、公式な臨床におけるカウンセリングをする。実に始めるまではこわい感じがしていた。不安でたまらないと思っていた。始めてみるとどうもない。しかしやはり自分で一つ疑問になり、それが終始面接中に心底を流れていたことといえば、立場の問題だ。クライアントの自発力(性)はやはり大きいものだと思う。自分自身も相手から問いかけて、はたと困

たが、やはり大きい力は自ら進展する力だろう。」(5/4(金)(雨))、「昨日の初体験としてのカウンセリングのことについて、今夜、先ほど、急に世界像が開かれてき始めた。というのは卒業論文で、自分の取り組んだテーマを発展させるべき絶好の条件が出てきたからだ。ケース・スタディということとその補足的なものとするのである。絶えず広い視野に立って、問題を明らかにしなければならない。その意味で社会心理学的見地での臨床心理(セラピーを中心とした)に大きな役割を演ずる研究方向は、これから展開させられることが必要である。臨床心理は、その問題の人の拠って来たところを明らかにするだけでなく、その人の展開する行動の場も明らかにしなければならない。社会心理学と“対(つい)”をなす必要がある。」(5/5(土)(曇後晴))、「午後久しぶりに自分自身の時間をもった。1時から3時まで、授業の合間にこの前のカウンセリングについてのテープを聴く。その前に畠瀬稔講師に第1回目にしては(カウンセリングが)とてもよく出来ているといわれ少し照れた云々。」(5/10(木)(晴))、「“カウンセリング演習”の助力。畠瀬講師の手伝い云々。」(5/11(金)(晴))、「切迫したという感じもなく、ゆっくりと教育相談に来た人の相談を受けることができると思っていたところ、50分くらい遅れて、それも電話で、(母親から)今日のこの時間、都合が悪いということである。とても失望したけれど、このような例も一つの臨床の治療が進むにつれて起こるものだろう。本人が学校に行くことと相談に来るとのこととの板ばさみになっている場合のやり方だ。それにしても電話の内容によると、本人はまたあれから暴れたというのだ。母親としても、それが不安でたまらないのだろう。当方としても、それだけにますます責任を感じず。この時間に出来ないとしたら、どんな時がよいか。出来たらどンドンやっていきたい。」(5/30(水)(晴))〈(注)これは、昭和37年当時すでに狭義の“家庭内暴力”が始まっている貴重な記録である。〉

「(前文略)。どれにしても自分として、この土曜日はかせぎ時となった。臨床心理学研究会、その後の来談者との面接、この中であって、自分の問題、科学的な理論に裏づけられた実証性のある研究を求めなければならないと思う。ともあれ、成果はどうなろうと、あれこれと厳密な記載(記述)をしていって、そこの底に横たわる本質を見抜かなくてはならない。ここに単に街頭での手相術師とは違った、また“おがみや”とは違ったものが要請される。道は厳しい。それでも我々は、人間性の究明にがんばりを利かせなくてはならない。」(6/2(土)(晴))

このころかなり真剣に臨床心理学的実証研究への指向

性を高める努力をしていた。ここでの臨床的取り組みが、後の修士論文の研究題目になる「吃音児の自己意識に関する研究」に発展していく契機となる経験となった。具体的には、一人は小学6年女児の遊戯療法であり、もう一人は小学5年男児を持つ母親とのカウンセリングであった。前者との取り組みでは、子どもは大抵は保安官になり、こちらは毎回絶えず捕われの身の捕虜になる体験をした。この子どもは家庭ではいつも母親が拒否的態度で接し、差別待遇をしていた。母親は妹の方を溺愛していた。その分だけ姉は遊戯場面で再現していたと考えられる。他方で、吃音の男児を持つ母親とのカウンセリングでは、毎回のように胸ぐらを捕まれる感じで、何とかして直してやってほしいと懇望されていた。これらの経験から、修士論文の問題意識が固められていった。

なお、前者の母親は、母親担当者に子どもが中学3年の卒業前に、本児を拒んでいて寂しい思いをさせていたこと、これからは妹と同様に接したいとを述べてカウンセリングを終了した。

④信楽研究会への参加：この研究会の淵源は正木正教授が行って来られた「精神薄弱児（注：知的障害児のこと）の人格発達の研究」に始まる。その先生亡きあとを承けて高瀬常男助教授が継続して実施してきている研究会（＝通称“信楽研”）である。池田太郎園長のもとでの“信楽らしさ”の究明である。

これに参画して、早速信楽に3泊4日（7/21（土）～7/24（木））で出かけている。京都では祇園祭りが終わり、本格的な夏が到来する時期である。

「3泊4日の信楽学園調査に出かける。非常に少数であるけれども、信楽研究会のメンバーで問題（＝質問項目）を作り、それをここで調査せんとするためである。自分としては、自分なりの問題意識で、別に用意している。すなわち、精神薄弱児の自己意識を、一体どこから突いて行けるか。彼らは、自分のイメージにどのように真剣に取り組んでいるかということになる。実際に会った範囲の人では、かなり上位のものもあれば、逆にてんで変化していないものもある。まあこの3日くらいいて、どのくらい自分で観察したり、面接できたりするかは未知であるが、時間を利用して、大いに頑張る自己を高めよう。」（7/21（土））

「信楽の調査から帰って、一安堵した。何といっても3泊4日の滞在では、いかにもお粗末に過ぎない。といってもいつまでも居れるわけでもあるまい。とにかく、この期間内で得た資料について、できるだけ頭の中を整理しておかなければならない。作業を中心とした学園や青年寮の生徒の活動の範囲は段階づけられる。第1段階は新規入園者組で、程度のましなのは“小蓋押し”の仕

事をする。それにかからない者は、畑の仕事である。第2段階にある者は、自動車ドビンの出来上がったものに、ヒモをつけたりするか、またはドビンかけとって、自動車ドビンでまだ焼いていないものに糊葉をかける仕事をするものである。それらは、他の段階に比して、わりに簡単である。第3段階は、型にはめ込む仕事の“鑄込み”であろう。いよいよ第4段階は、あまり程度は高等ではないが、それと平行して授産場での仕事がある。いよいよ外に就職に出るのは、その次の第5段階である。」（7/25（木）（晴））。

そこでは、フィールドワークの対象児の段階付けを第1段階から第5段階までに位置づけている。

このフィールドワークでの調査研究の結果は、その後、夏休み中に整理が行われた。当時の日記には、研究会を続けて“サボったこと”，修士論文のこともあり、毎夜のようにそれが気になる夢を見ていることなどが記述されている。データ処理の苦しい時期であろうか。

その後、昭和37年10月に東北大学教育学部で日本教育心理学会第4回総会が開催された際に、共同研究として発表された。大学院1回生で学会参加をし、共同研究の発表の楽しさを体験した。上野駅から仙台駅に向かう夜行列車では、東京大学大学院の臨床グループの面々とも一緒になった。彼らはカウンセリングの共同研究発表（“関係スケール”や“生命力：バイタリティ・スケール”の検討）を用意していた。

⑤京都カウンセリング研究会主催の講習会に参加：これは、比叡山延暦寺の別宿院で7/28（土）～8/2（木）まで5泊6日の日程で行われた合宿形式の研修会である。比叡山の別宿院は夏場とは云え、涼しい感じであった。この6日間の合宿研修体験は、とても貴重であった。自分がいかに主体的に動けるかが、まさに問われる研修会である。私は最後までよく動けず、どこのグループにも所属できず、第三日目によく“モヤモヤグループ”に所属し、一番に没主体的であった。参加メンバーの多くは学校教員であったので、自然と小、中、高という学校種別でグループが出来て行った。われわれはそれらには入れなかったし、入る必要も感じなかった。その後私のカウンセリング学習、そしてそれ以後のカウンセリング実践において、衝撃的な体験が起こることになる。当時の日記には、簡単にしか記述されていないが、私の記憶には鮮明に残っている。それは前年（昭和36年；1961年）に来日したロジャース、C. R. の講演会やロール・プレイングの録音記録をこのグループで聴取することが出来たことである。内容は、ロール・プレイングで金銭に困窮した学生のクライアント役（対馬忠先生；当時京都府立大学）に、ロジャースがカウンセラー役で双方が英語で面

接を実施したものである。その後、トカゲが尾を切られた後でも尾を再生することが出来るように、人間にも再生能力があることを語った講演の録音も聞いた。これらは詳しくは、氏原寛・村山正治編 2000 『ロジャーズ再考』創元社に所収されている。

なお、「比叡山の第2日目。日中のゆるやかではあるが、緊張感の高いカウンセリング研究から開放されて、夜、夕涼みがてらに四明嶽（しめいだけ）に散歩に出かける。男女メンバー合せて十人ばかり。夜の山、しかも人里離れた比叡山の感じは何とも表現しがたい気持ちでいっぱいである。暗い山道、それは確かに近代化された山道だが、とても静かで、この静けさの中をグループで出かけるときの気持ちは沈黙であっても、最高の感じになる。自分は、比叡山に万事をこのこもりにかけて出かけたわけでない。切迫された気持ちは、あまりない。それだけにこの六日間はとても意義がある気がする。それは、この比叡山という聖山の持つ歴史的な意味合いと自分の成長の意味合いに一脉通じるものがある。」(7/29(日)(晴))との記述がある。

⑥プラクティス研究会：これはカウンセリングの実践に関する研究会で、通称“プラ研”と呼んでいた会で、自分が取り組んだカウンセリング事例についての、完全逐語記録を元にしての“グループ・スーパービジョン”である。私の印象では、いつも厳しいものであった。当時、産業カウンセリングの普及・発展に熱心であった西園寺二郎氏がいて、事例を出してみんなで検討していくわけであるが、私など大抵「田畑さんは、どういうつもりでカウンセリングをやっているのか?!」と問われたものである。この「どういうつもりで……」という言葉聞き始めると、身体からある種の“拒否反応”が起こっていた。なかなか素直になれず苦痛であったし、反発さえ覚えていた。ここから学んだことは、カウンセリングの指導には、レポーターがやる気を起こすようにすることをどのように仕向けていくかということであり、指導的な立場の人の態度にも、受容的な雰囲気也不可欠であるということであった。特定の女性メンバーには優しく、私にはきついというのは不公平だと不満を感じた。これについては、その後は“反面教師的な態度”だと受け止めるようになった。

⑦大阪府中央児童相談所での囑託判定員：これは伝統的に京大の臨床心理系大学院学生が囑託判定員として、先輩方から引き継がれ雇用してもらった。今で言う“アルバイト”である。当時は、所長が稲浦康稔氏（京大文学部出身）で、厚遇していただいた。

朝早く7時30分位に左京区の下宿から自転車に乗って京阪三条駅に行き、そこから京阪電車に乗り、京橋駅で

降り、そこから国鉄環状線に乗り換え、森之宮駅まで行き、それから大阪城南側の大阪府厚生会館（当時）ビル内のある階に午前9時30分までに駆けつけた。業務は午前中は相談にやってきた幼児・児童の心理判定で、2～3種のテスト・バッテリーを組み、それらを昼前から午後にかけて整理し、一枚の報告書にしていた。また午後には、たまに定期的な継続ケースにも携わった。ここでもいろいろなケースに出会った。よく覚えているのは、3～4歳の男児の吃音（といっても“流暢ではないが正常”：normal non-fluency）であるが、彼と2回くらい遊戯面接をして、すっかり治った。後にその母親が親戚や近所に「田畑先生に治してもらった!!」と吹聴して廻ったということをソーシャル・ワーカーの浜島さん（京大教育社会学コース出身）から報告を受けたことがある。また自閉症児の母親面接に係わったり、神経症の男子中学生のカウンセリングも継続した。このケースがある日電話をかけてきて「体調が良くなく、通いたくない」と言ってきて「あなたの自由にしたら良い」旨の回答をしていたら、判定課長・三谷昭雄先生（精神科医：後に神戸女学院大学）に咎められた。これは神経症だからといって甘くしてはいけないということであった。医師の責任を知った感じである。児童相談所では巡回相談といって就学前の幼児に判定を実施するもので、府下の東西南北に日帰りや宿泊で行ったこともあり、これらも貴重な経験になった。この児童相談所での判定業務は、通算4年間、大学院博士課程2回生まで続け、3回生は大学院が研究多忙であることから、後輩に譲った。

⑧修士論文への取り組み：修士課程の最大の仕事は、何といても修士論文作成という課題である。当時の日記にも、その取り組みへの心理的な不安定さや葛藤が多く記載されている。最終的には、卒論での研究で吃音が都会で重視されたこと、臨床経験からも吃音児とその母親との関係に独特のものがあること、自己意識と対人認知関係がどのようになっているかが疑問であったこと、そしてある程度纏まりがあるものになること、などからテーマは『心理的葛藤としての問題行動の一研究—特に吃音児の自己意識と対人感情の分析を中心として—』とした。当時、土曜日に開催の臨床心理学研究会（＝読書会）に参加して下さっていた牧康夫先生（京大人文科学研究所助手）に、研究計画を聞いていただいたりした。先生は話を聞きながら、図解をして明確化して下さり、まるでカウンセリングを受けているかのような感じであった。この度、研究室移転で昔のものを整理していたらそれが出てきた。いまは故人となり残念である。

具体的な内容は、被験者を先輩（講師）の仲立ちで、京都市内の小学校3～6年生に吃音児のスクリーニング・

テストを実施し、(1)児童、(2)父母、(3)学校教師の3者のうち、いずれか2者に“どもりをする”という認知をされた児童N=28を抽出し、非吃音児N=28を性別と年齢をマッチングさせた。これらの児童に、W-A-Yテスト(改定版)を施行し、Negative Affectionの度合いが高い群と低い群(2群)でさらに2群に分けた。(注:このような調査は今日では不可能である。)

これら両群の児童に、(1)BC-SCインベントリー(身体ならびに自己に関する質問紙);55項目、5段階評定—これで「自己受容」(気になる—気にならない)、「他児と比較」(劣っている—優れている)の度合いを見る二次元を設定した。(2)P-Fスタディ[児童用]—これによって対人感情における心的エネルギーの方向を測定した。結果は、まず使用尺度の折半法とテスト—再テスト法で信頼性を検討した。その後、設定した4群間の差異を比較検討した。各尺度には、統計的な有意差は見られなかったが傾向差は見られた。すなわち、(1)吃音児の対人感情の否定的な感情の高い群と低い群では、高い群のほうが、他の3群よりも自分に関する意識で、身体ならびに自己意識も否定的である傾向があること、しかも群内の個人差が他の3群よりも小さいこと、また自己評価に対しての脅威が見られること、さらに自分の身体ならびに自己意識において、他児との比較と自己受容の次元とで両者の意識水準は不均衡であることなどが判明した。(2)P-Fスタディによる意識—無意識水準での対人攻撃の感情(E-E%)はやや高いことが判明した。

なお、この修士論文の結果は『京都大学教育学部紀要第12号』(学術論文No.2,昭和41年3月,46-60.)に、遊戯療法で長期に渡って継続した吃音女児のケース(小学6年から中学3年まで)の追跡的に実施(中学1年時#35と3年時#90)した結果とともに公表した。

⑨故・正木教授の夢でのお告げ:修士課程1回生の夏、7/20の日記に次のような記述がある。このころ④信楽研究会のフィールド・ワークに出掛ける前に気分が切迫していたが、それ以外に強いインパクトを受けたことが伺える夢である。

「ピンスワンガーの『夢と実存』説に従えば、無意識の中に入り(る)という意味は、フロイトのもの以上のものがあるという。私は、この前、とてもうす気味悪い夢をみた。恩師とまでゆかずになくなられた正木教授が「おれのあとをつげ」といわれたことばだ。こわくてとび起きそうだった。それまでの自分は、レフト観覧席にホームランを打ち込みたい(=遊びへの逃避のシンボル)気でいたところを急に先生にそういわれて、今の自分をまざまざと反省させられる思いであった。なくなられたあとの葬式の代表は、やはり自分が衆目の見守る中を、

自分でこわごわ手が震えるのを知りつつ……。

こんな夢をみるとき、いつのまにか、これではいけないと思うようになっていく。」《原文のまま》。

これは、研究者、大学教師になることを躊躇している自分への正木教授のお告げとして受け止めることの決断を迫られた夢として、今再び認識させられた次第である。レフト観覧席にホームランを打ち込むのもそうである。それらの実現のためにはそれなりの努力も必要であった。

⑩実験英語のかん詰め学習に応募:修士1回生の11/11の日記によれば、この時期に京大で教養部語学教育教室とアメリカ研究センターとがタイアップして、年末年始にかけて英語教育の実験計画が立てられた。その為に選考試験が行われるが、14名か20名そこそこの採用に対して、320名以上が応募した。学生、教官(助手のみ)の人々から選抜され、いかに生活をするかをみる前に、どのような計画配置が成されるか面白い。出来る人を採用して訓練すれば、当然に効果はある。しかし出来ないものばかりを集めては、統制が取れないに決まっている。どのようなグループで、どのような層が選ばれるか、極めて面白い。試験を受けて駄目であればもともとだが、この実験配置をいかにするかは、今から興味のあるところである、という記述がある。応募結果は見事“不合格”であった。

なお、小学6年の冬休みからずっと継続して、わが“こころ”と“行動”について記していた日記は、修士課程2回生の6月25日(火)(晴)、6月26日(水)(晴)の以下の記述で終わり、これ以降はない。

「研究会。信楽研、一寸した行き詰まりの感深し。差し当たり、東京での学会取り消し。小生、一回も発表せずに終わるか。残念だ。」(6/25)

「日毎に暑くなる。夜の研究室は、しかし、存外涼し。ここでは能率も上がると思う。ガンバル時期だ。あとインベントリーを一冊作れば、卒論(=修論の誤り)のデータ取りに本格的に入れる。」(6/26)

この頃は、とにかく教育相談の実践、学外の児童相談所への囑託、「信楽研究会」改め「人格発達研究会」の幹事役、また修士論文のデータ収集の実施、私の人生の良き伴侶となる“女性”の存在の自覚等で余念がなくなり、日記も飛び飛びにしか記録されていない理由である。

また、この時期は、私の心理療法、とりわけ来談者中心療法の観点では、第1段階である「療法の吸収・模倣期」という風に位置づけられる。

3. 博士課程時代 (昭和39年4月～昭和42年3月)

①修士研究から博士研究への転回：私の場合は、修士課程の研究論文テーマと博士課程に進学してからの研究論文のテーマとは変更している。転回というか螺旋的な展開ということである。それは、広く言えば臨床心理学領域の研究には変わらないが、言語障害の一つとしての吃音研究は、さらに発展すれば出来ないことはなかった。言語研究は、当時京大で「音声科学研究会」という学際的な研究会が、教育学部視聴覚教育講座、文学部言語学講座、それに医学部耳鼻咽喉科講座と工学部電気工学講座などが主体となって開催されていて、時々参加させてもらっていた。しかしそこで感じたことは、言語研究領域は奥行きが深い領域であること、このままさらに展開すると“泥沼”に嵌まりかねないこと、さらに関心事が心理療法という実践に移り、集中的に取り組んでいたことなどの理由からテーマを変更していった。

この修士論文の結果の一部を、1964年10月に広島大学で開催された日本心理学会第28回大会で発表した。私の発表した部会では、吃音研究で、後に東大教育学博士第1号を取得されたという内須川洸先生（現：昭和女子大学）も一緒になって、機関銃のような矢継ぎ早やの質問を受けて、驚くとともに全国学会の怖さを経験した。

この年に東京オリンピックが開催されたが、その学会帰りに倉石教授や助手・先輩の面々と一緒に、厚かましくも先生のマイカーに同乗させてもらい、岡山県の瀬戸内海海岸の牛窓町に一泊した。翌朝、当時交際中であった彼女（＝修士課程を修了し、3月26日に結婚）に会う為に岡山駅まで送ってもらい、一足早く大阪駅まで特急列車で帰ってきた。その結果、大阪駅で彼女と無事に落ち合い、第18回東京オリンピックの入場式を大阪駅のコンコースに特設してあるカラーテレビで見た。カラーテレビでみる国立競技場・アンツーカーの色は鮮明であった。

②博士課程修士資格論文への取り組み：当時、心理療法の研究は、かのロジャース、C. R. が1950年代後半から提起していた「過程尺度（process scale）」の開発とその適用による実証的研究が主流であった。京大でも先輩諸氏（例えば阿部八郎、鏑幹八郎、村山正治ら）もそれを取り入れて試行的カウンセリング実践に取り組んでいた。

私がこの頃関心をもっていたのは、セラピストクライアントの両者の関係を面接記録にしたものに、ロジャースらが開発した「過程尺度」（7段階尺度）を適用し、第3者が評定し、段階づけて行く仕方より、バレット-

レナード（Barrett-Lennard, G. T.; 1962）のように面接の当事者であるセラピストクライアントの両者その人に評価させるという仕方のほうに、より強い関心があった。バレット-レナードの研究は、治療的な要因（ロジャースが1957年に提起したセラピストの3条件—“自己一致”，相手への“無条件の肯定的配慮”および“共感的理解”）をベースとして、5条件（“共感的理解”，“尊重の無条件さ”，“尊重のレベル”，“一致”，“知られたい意欲”）に拡大し、これら各要因毎に10項目づつ構成し、『関係目録』（Relationship Inventory）を作成したものである。これを実際の面接に適用して検討した結果、心理療法の成・否は、セラピストの認知より、クライアントの認知の方が有効であるという結論を得たものである。

この頃、私は博士課程1回生であったが、6月のある日、少年鑑別所から紹介されてやってきた中学3年男子の非行少年に相談室で出会った。面接は合計6回で本人の申し出で7月下旬に終了したが、この面接を毎回録音記録し、「現象学的分析」をしていくことと、バレット-レナードが開発した『関係目録』の簡略版（『治療関係調査』）を適用したもの（＝初回面接と第5回面接の2回分の比較検討）とを総合的に考察した。このケースの人格適応変化は、面接後の自由記述による「フォロー・アップ調査」によって捉えたが、その結果は“性格行動の次元”だけでなく、“身体生理の次元”でも変化が認められた。特に、実施した『治療関係調査』のクライアント側の第1回と第5回の知覚が全く逆転し、セラピストへの知覚が好意的に変化していることが不思議というか、今後の展開の契機になった（『“心理治療関係”による人格適応過程の変化過程の探索的事例研究』田畑，1966：臨床心理）。

そこで考察した結果から、今後、治療関係の変化は単に面接場面だけでなく、その前・後、つまりもっと面接の経過や流れに沿って、(1)治療場面に入る直前の状況、(2)治療場面での状況、そして(3)治療場面から退室した直後の状況、の3状況について検討していく必要を感じた。これが、私の心理治療関係の研究の方法になる『心理治療の体験目録』（セラピスト用；クライアント用）の開発に発展していった。そして、そのためには、まずいろいろな立場で実践している熟練のセラピスト達に『心理治療関係におけるセラピストの体験様式の調査（I）』（1965. 12. 20付）で郵送調査を実施した。いろいろな立場とは、精神分析的（一派）、来談者中心療法、指示的療法、折衷的療法、学習理論的（一派）、森田療法、実存分析、催眠療法、その他の9つの立場であった。これらの立場で実践している熟練のセラピストには、倉石

精一教授や佐藤幸治教授に紹介状を添えてもらったりして助かった。これらの調査は(1)「心理治療が、よりうまくいっていると思われる場合」、(2)「心理治療がうまくいっていないと思われる場合(「もしあれば」)について、各セラピストに自身のことばで“ありのまま”記述してもらうことを旨とした。かかる項目集めの調査といえども、手厳しい注意や批判を下さった人もあったが自戒の言葉として受け止めた。

これ以後の一連の研究については、私の研究業績に記している。簡単に言及しておく、『セラピストの治療的要因の因子分析』(1967:臨床心理学研究)、『クライアントの治療的要因の因子分析』(1968:臨床心理学研究)、『初回面接における心理治療関係の特徴』(1968:京都大学教育学部紀要)、『面接初期に中断した場合の心理治療関係の分析』(1969:臨床心理学研究)、『心理治療関係における治療的要因の分析』(1969:心理学評論)、『心理治療過程と治療的人格変化(Ⅲ)』(1974:相談学研究)などである。

③結婚するということ:これは“私的な事”であるが、おおよそ臨床心理学の実践研究に携わるものは“自己のパーソナルな生き方”を抜きにしたり、無視しては語れない。当時、教授陣の中には、学生の分際で結婚なんてとんでもないと考えていた先生方もあったかもしれない。しかし博士課程で論文を書くには、食事や身の回りの整理整頓をする余裕はないと考えていた部分もある。現に先輩諸氏も博士課程2年の修了時点で、“博士課程修了資格論文”をまとめるため、結婚し、身を固めていく者も数人あった。私もこれを参考にして博士課程1年修了の昭和40年3月26日に身固めをした。私は25歳であり、彼女は24歳であった。当時の私を知る人々は、結婚したことで人物が変わってきたと言った者もいた。当時は育英会の奨学金以外はまだ定収入はなく、結局妻に食べさせてもらったことになる。

教室の先生方の中で、結婚式にはまず出席をしていた。ただくのは困難と考えられた学阪良二先生には、彼女と共に先生のお宅を訪問し、結婚式に出席をしていただくように依頼し、結局出席していただいた。(結婚式終了の2年後、助手就任1年目の夏・1967年8月に北海道教育大学札幌校で日本教育心理学会第9回総会が開催された際に、われわれの共同研究発表(=高瀬常男先生らと「共感関係」の研究を継続中)の後で、親友の増田忠司君(現姓:井上/現:甲南女子大学)と白老近辺を国鉄(現:JR)のローカル列車で旅行していて、たまたま先生と列車内で鉢合わせになった。この時、先生の夜の宿泊先を聞き、先生の宿舎がある阿寒湖のホテルに訪ねたことも思い出になる。先生は、我々を□と○のイメー

ジをされた由で、お祝い品にイスをいただいた。この品は現在までずっと大事に私の研究室の奥側イスの近くに置き、ちょっと物を置いたりして重宝している。)

この結婚で、私はお陰で無事、博士課程3年の単位取得後満期退学とともに“博士資格論文”を提出し終えることが出来た。後に、それに対して教育学の審査員はそのまま“合”(=学位授与可)の判定を下していたと、助手の人が漏らしていたが、私には“学位論文”としてはまだまだだという認識であった。

大学院博士課程から始めた研究は、その後、助手時代専任講師・助教授時代の約10年は、私の来談者中心療法の第2段階であり、「質的・数量的・客観的研究の時期」と位置づけられる。

第Ⅱ部 心理臨床への道

—職業生活時代（昭和42年4月～今日まで）を語る—

大学院博士課程を単位取得後満期退学し、それ以降は職業生活に入ることになる。いわば研究者、専門職に就くことになる。

以下に職歴を辿って、1. 京都大学時代、2. 千葉大学時代、そして3. 名古屋大学時代を語ることにする。

この時期は、一方で日本が高度経済成長を遂げて、世界に進出していくのと並行に、他方で各地に公害や自然破壊がもたらされ始め、人間の心の問題に関わる臨床心理学の世界にも波及し、多くの課題が生じてきた。

1. 京都大学（助手）時代 （昭和42年4月～昭和44年9月）：

①助手に就任：博士課程を満期退学して、すぐに助手に就任した。当時、臨床心理系の鏑幹八郎助手（現：京都文教大学副学長）は、アメリカ・ニューヨークの精神分析研究所（＝ホワイト研究所）に長期出張をし、ポストは空席になっていて、学習心理学が専門の先輩、今米國晴助手（現：名古屋音楽大学々長）が勤めていた。私は倉石教授から助手に誘いがあったが、博士論文の目度（めど）が立ち、博士課程が満期になるまでは助手はご免だと断った。（←今時、そんな贅沢なことを言う余裕はないが、古き良き時代であった。）

助手は、教授・助教授・講師を助ける職種である。倉石教授には、朝8時30分には家を出るように言われていた。助手になってからは、夜も何かと遅くなった。今日と違って非常勤職もあまりなく、土曜日に西宮市の夙川学院短期大学に非常勤（心理学担当）で出かけた後、阪急電車内から家が（＝当時、高槻市に住居があった）を眺めつつ、京大まで引き返していた。非常勤で出た場合は、公務員として土曜日午後勤務時間の穴埋めに勤務していたわけである。

また助手として当然であるが、学部学生や大学院学生の面倒を見るという仕事もあった。教授陣と学生群の中間にあって、運営をしていくことが多かった。学生といっても、いろいろな者がいるが、助手として全ての学生に等距離でつき合うことが出来ていたかどうかは、学生の側の認知で異なるかも知れない。とにかく、実にいろいろな仕事があった。“雑用”とって、むしろ何でも好んでやっていた。教育職・研究職であるからといって、自分の研究室で自分の研究のみに籠るわけには行かなかった。大体、助手室は地階の心理教育相談室受付にあり、

大学院学生も私の後ろを通過しないと相談室の受付や継続相談の業務の手続きができにくい状況にあった。

②科学研究申請書の作成：助手になった翌年度（昭和42年秋）に、文部省の科学研究費補助金・総合研究の申請をすることになり、その書類作成に余念がなかった。総合研究というのは、他機関をまたいで研究を計画するものである。研究課題は『心理療法の効果判定に関する実証的研究』（昭和44年～昭和45年）で、教育学部教育心理学教室（倉石教授、梅本助教授ら）を中心にして、保健管理センター助教授・笠原嘉、医学部精神医学教室、藤縄昭助教授（ともに教育学部非常勤講師）、天理大学・河合隼雄教授（教育学部非常勤講師）、大阪教育大学・鏑幹八郎助教授、追手門学院大学・斎藤久美子助教授（教育学部非常勤講師）他と4つの分担研究班を組んだ。ここでも傑作なことがあった。ある先生の承諾書に印鑑が捺印してなくて、市内の印鑑屋を半日くらい自転車で捜し廻った。これも助手の仕事であると辛抱した。各研究班は、後で言及する大学紛争中も何とか実行していった。

③博士論文完成の目度をつける：心理療法の研究論文をまとめて、専門誌に投稿する前には必ず倉石教授の目を通してもらってからにしていた。先生を掴まえるには、教授会終了を見計らい、事務室に待機しており、会議室から出てこられて一呼吸を入れて見てもらっていた。先生はよく教授会の後などに気分転換にと、梅本助教授のピアノ弟子となり、教わっておられた。その合間を縫って先生に目を通してもらったわけである。

助手2年目を迎えた秋、1968年10月に今でも覚えているが、メキシコで第19回オリンピックが開催されている時期に、早稲田大学・新宿キャンパスで日本臨床心理学会第4回大会が開催された。この大会で「第1回内田勇三郎賞（日本臨床心理学会・学会賞）」が私に授与されることとなったことを聞いた。感激したと同時に、この賞は多くの研究協力者（セラピストやクライアントの方々、『治療関係の体験目録』作成に協力してくれた先輩諸氏など）の助力のお陰であると感じたことである。これで大学院修士課程の入学式で当時の平沢興総長が告辞で「学会賞の一つくらい受章せよ!!」と檄を飛ばされたことも浮かんだ。これで一つのノルマは果たした感じになった。

他方で、このときに社会情勢は既に混乱し、新宿駅は角材をもった学生集団が占拠して“騒乱罪”が適用される危機状態にあり、われわれは受賞後に後輩とともに会場から早々に脱出した記憶がある。（なおこの後、大学紛争や学会紛争が始まり、翌年（1969年）には名古屋大学が当番校となり、日本臨床心理学会第5回大会が開

催されることになっていたが、会場は大学紛争のため名古屋大学のキャンパスから急遽名駅前の愛知県中小企業センターに変更になり、公開理事会となり、ここも早々と退散した。当時「臨床心理技術者」資格認定業務が開始される時期になっていたが、それが障害者の排除・選別・差別に加担することになるという運動論とぶつかることとなった。また学会賞もその後授与が凍結されたままとなり、第1号のみで永久に打ち止めとなっている。）

④京大紛争になる：昭和44年1月には、既に前年から始まっていた大学紛争によって騒々しい時代状況、大学状況になった。それは東大紛争により、安田講堂が占拠されるに至り、機動隊8,000名を導入して学生を排除したが、学内の破壊により東大入試中止という社会問題にもなり、多くの紛争への参加者が京大にも押しかけてきたことに象徴される。学生運動も国家権力打倒には一致しても、各派のセクト争いの争点や主張の違いはなかなか分からない状態であった。助手は、教授陣と学生集団の間で、“マージナルマン” (marginal man; Kurt Lewin) のようであった。各学部は封鎖されたが、助手は封鎖された建物には出入りが出来ていた。しかし、われわれはどの派にも属することをしないで、“日和見”をしていたということにならうか。助手の任期制度（2～3年を限度にする）については事務長にも掛け合って、公務員の規定にはないことも聞いていた。臨床心理系の助手としては、外来のクライアントが封鎖されて相談室に出入りが不可能になったりすることへの配慮、「相談票（カルテ）」が外部の人に破壊されたり紛失しないように、と大学院学生に応援して貰い、学外の各所（自宅など）に移転させたりした。これでまた心理学は個人的な抜け駆け行動を取っていると批判されたり誤解されたりしたが、なるべく話し合うことが肝要であった。

当時民間企業に勤めていた同級生仲間は、心配して学部長・鯉坂先生も招き、比叡山のホテルで激励会を開催してくれたこともあった。また、わが恩師は学生厚生補導委員長（＝学生生活委員長）であったが、学生の追求で精神的に参ってしまい、大阪の某病院にドック入院される羽目になり、そこにお見舞に参上したりもした。

⑤他大学への応募：助手職の2年目、昭和44年の夏頃、他大学（千葉大学教育学部・専任講師）の公募人事があり、倉石教授の勧めで応募した。最後に候補者が2名に絞られ、面接も受けた結果、私が採用されることになった。倉石教授には、事前に「自分としては学位論文をまとめる方が先だ」と申したら、この時はさすがに咎められた。教授には「学位論文などいつでもまとめられる」「チャンスがあるところに赴任したほうが良い」と助言をされた。千葉大学には専任講師で転出した。千葉大学

も当時、大学管理臨時措置法でいう“紛争校”として認定されていたと思うが、京大ほどの大変さはなかった。大学本部周辺が騒々しいくらいで、教育学部は静けさが残っていた。

後進のために“老婆心”ながら述べておくと、大学の場合は、教育職・研究職という意識が強く、専門誌の研究業績があることが問われることはいうまでもない。さらに今日の大学の状況では博士学位があることに越したことはない。しかし臨床心理学では、さらに臨床実践能力や技術、態度や人物とか、パーソナリティのあり方が問われることも知っておくことが肝要である。堅物で挨拶もろくに出来ない人、人間関係が下手な人、他人を無視してでも研究に専念する人が時々いる場合がある。これでは集団の職場としても困りものである。そのような人がいることで職場の雰囲気は暗く、ギスギスするようなどころでは、何のための現実の人間援助の臨床心理学であるかが疑われるであろう。

なお、私が京大を離れる10月頃は、時計台を占拠していた学生も機動隊が導入されて排除され、大学紛争が収束し始めていた。また友人や大学院生、教室事務員がいろいろと送別会をやってくれた。今でも記憶にあるのは、大学院の連中が京大農学部グラウンドを借りて、送別のソフトボール大会を開催してくれた。私は守備ではレフトを守っていて、スラッガーの川上範夫君（現：奈良女子大学）に、はるか頭上をライナーでかっ飛ばされ、良い思い出になっている。また「別れの色紙」の寄せ書きに、高垣忠一郎君（現：立命館大学）は「サラバ！ クールナ ヒトミヨ 臨床の鬼よ！」など記してくれた。こうして思い残す事なく、10月はじめには千葉に単身赴任し、11月はじめに妻と当時3歳と1歳になる息子たちを迎えた。

2. 千葉大学時代

（昭和44年10月～昭和50年7月；昭和50年10月まで併任）：

①講義ノート作成の苦勞：千葉大学教育学部は“教員養成”を主たる目的とする学部であった。設置されている課程は多く、4年制の小学校教員養成課程、中学校教員養成課程、養護学校教員養成課程、幼稚園教員養成課程、特別看護教員養成課程などがあり、その他キャンパス内の別棟になる木造の3年制の養護教諭養成所などがあった。従って、これらの課程を修了するための心理学関連の授業を多く担当することが必要であった。

私は教育心理学研究室に所属し、教員は私を含めて6名であった。そこには教育心理学科目と発達心理学科目の2つの科目があり、私は発達心理学科目の専任講師と

して採用された。辞令は国立であるから、京都大学から千葉大学への配置換というものであった。教育学部の学生は、主専攻ではこれらの課程のいずれかに属し、教員免許取得に関する科目を受講していく。また副専攻として、「教育心理学専修」（他に「教育学専修」があった）という制度があり、教育心理学関係の科目を専修し、教育心理学専攻に近いものになる。

赴任当時、昭和44年10月は、後期であったから担当科目は少なかった。翌年から講義では「児童心理学」（小学校課程は必修）、それに加えて「臨床心理学」（小・中・養護学校・幼稚園-各課程の選択科目）を担当することになった。児童心理学は、小学校課程は必修であるから、後に同僚の井上健治先生が東大に転出されてからは、学生は私の授業を受講し、期末試験で必ず通過（合格）をしなければならなかった。児童心理学は、小学校課程の学生（N=270）を2～3回の繰り返し授業であった。このほかに講義では幼稚園教員養成課程の「幼児の性格と精神衛生」、養護教諭養成所の「教育心理学」も担当していた。従って、講義ノートを作成することに明け暮れた。また、この他、教育心理学専修の学生に開講されている「教育心理学演習」、「教育心理学実験演習」、「教育相談法演習」など担当した。講義や演習の教材は、京大と違って助手や教室事務補助員はいなくて、全部自分で準備しなければならなかった。千葉に赴任して、子どもたちもまだ幼く、自動車の普通免許取得をすれば何かにつけて便利だと思っていた。その時間くらい取れるかと思っていたが、そのような余裕がなかった。結局、実行できなかった。また私がいた頃は、大学院教育学研究科はまだ設置されていなくても、そのような多忙さであった。

ただし、何か変だと感じていたのは、夕方の5時以降になると先生方が三々五々に帰路につかれてしまわれることであった。京大では、夕方以降からは自由に研究会や研究がなされるのに、と思ったことは確かである。

②博士論文の完成と学位授与：千葉大学に赴任したあと、当時は毎週のように教授会や教官会議が開催されていた。千葉大学工業短期大学部に自衛官が入学することを巡っての、憲法第9条の（自衛隊）と憲法第22条（職業選択の自由）の論争があった。千葉大学ではこの件を巡って大学紛争が起こり、学長が辞任する事態が生じていた。教官会議では、かなり長時間を費やして論議されていたが、保健体育学系、数理科系、技能教科系の教員はかなりうんざりしていたことを思い出す。

赴任して2年目（昭和46年；1971年）の新春早々に千葉地方に珍しく雪が降り、かなり積もった。私が31歳になり、“而立”を迎えた節目の翌年の誕生日の直後であっ

た。子どもにせがまれて、庭に雪だるまを作ってやった。小さい玉を雪の中を転がしていくと、ちょうど程よい大きさになっていった。そして積み上げた雪だるまに炭で二つの目玉を入れたその瞬間に、これまでに発表してきた数編の論文を、学位論文に一本化し、まとめ上げる決意をした。こうして教授会や教官会議のあった日の夜にも、少しずつ書き上げていった。そして3月末には、手書きにして約400枚（付表を含む）を書き上げた。原本を東京・お茶の水のゼロックス社に持ち込み、4歳半の長男を連れて、コピーと製本に出向いた。（東京駅の周辺で、山口県の郷里出身で2年先輩の河本吉治さん（＝姉と同級生）に偶然ばったり会った。中学時代の彼は野球のエースで郷里大島郡内でも鳴らした人で、私はその綺麗な投球フォームに憧れていた。また品行方正でもあり、尊敬していた。風呂敷に包んであった学位論文の原稿を見せると、とても喜んでくださった。彼は中学のときに私を次々期の投手になるように投球フォームを教え、相手になり練習をしてくれたことがある。）

製本し出来上がった論文を携えて3月末に京大に提出した。11月には無事に博士学位が授与された。授与された後、教育心理学研究室でも報告し、教授会でも披露・紹介してもらった。先生方に喜んでいただき、有難いことと感じた。大学教員の免許状みたいにした。

なお、この年の1月1日付でそれまでの専任講師から助教授に昇進したから、学位取得と順序が逆の感じがした。

③教育臨床研究会の主宰：先にも言及したが、千葉大学に赴任してどこか物足りないという感じがしていたものに、研究会が何もないということであった。そこで京大で故・正木正先生が志向してしておられた“教育臨床”のネーミングを拝借して研究会を始めた。教育事象を巡る実践的な取り組み—カウンセリング・心理療法、教育相談、生徒指導、障害児療育、学級会活動、学校行事、家庭訪問、家庭と学校の連携など—を取り上げて具体的に検討して討議した。昭和46年4月から昭和50年6月まで続けた。会のあとで、学生と内地研究生が中心になり、有志でよく“ノミネーション”をした。おかげで成人病の兆候が出てきた。定期検診で、高血圧や血糖値が高く、糖尿病の予備群と判定された。（後に名古屋大学に赴任して、学内・学外の医療機関にかかり、食事療法も行い、正常値に戻した。）

この会のメンバーは、大学教員、千葉県教育委員会派遣の長期研修生、千葉県教育センター教育相談部・常勤職員（指導主事）、学部学生（主に指導生）、聴講生（元小学校長）などであった。6年間で延べ人数は50名であった。大学教員では特別看護課程の中島紀恵子先生（看護

学；現北海道医療大学：昭和46～47年会員）は、大阪で看護婦時代に正木正先生が肺結核で療養中に知己となった大段智亮氏に、患者の立場から看護の心や態度に厳しく鍛えられたことがあるという筋金入りの先生である。教員では、この他同僚の根本橋夫講師（後に助教授：社会心理学；現東京家政学院大学：昭和48年と昭和50年会員）も加わられた。ただ一人の聴講生で橋本佑二（はしもと すけじ）氏（千葉県元小学校長；昭和47年～昭和50年会員）がいた。この人を当時の学部長・飯田朝先生（政治学専攻）から依頼されて、私が窓口になり臨床心理学の受講を受け入れたが、当方の初期の心配も杞憂に終わり、大いに啓発された。同氏は臨床心理学を最前列で受講していたが、毎年受講されることは授業者には大変であり、同じ洒落は二度言えない感じがした。授業終了後の昼休みの付き合いもなかなか意味があった。休日には同氏の佐原市にも学生やわが妻すらも同行して相手をして貰ったり、よく昼休みに話題にしていた家庭菜園を見せて貰った。同氏は、聴講生の期間中に教育における「腰骨立てた良い姿勢」を語っていた。わが子どもたちが食事時に姿勢が良くない時、私が「腰骨！」と指摘すると、じきにピーンと姿勢を正していた。その後、名古屋大学に転任してからも同氏と交流があったが、1988年元旦に家族に見守られ、残念ながら享年76歳で病気で亡くなった。同氏には「人間の博労・教師」（田畑，1989；分担執筆）、「老いと心」（田畑，1993；分担執筆）に登場してもらった。特に後者では、名古屋大学公開テレビ講座（1993年）の取材で、ご遺族にも協力方応じていただいた。私は故・橋本佑二氏が今日でいう“生涯学習の実践を先取りしたモデル・ケース”として深く尊敬していた。同氏は私が所持している国語教壇の始祖・芦田恵之助書の掛け軸（私の誕生年の書）を部下の元教員の書家に模写させ、自宅の床の間に掲げて朝夕に静座をする際に対面していた。同氏は千葉大学で聴講生を続ける傍ら、地域社会の活性化に邁進し、私立の幼稚園長などされ、書籍も2冊（『腰骨立てたよい姿勢』（1974）、『教行三昧—園長道楽を語る』（1988））を出版し、絶えず学習過程にある人であった。同氏は講義で聞いたエリクソン、E. H. のライフサイクル論を取り入れて、行動し、実践していた。

この研究会は、学術的な会というよりも、実践検討主体の研究会であったが、私の教育観や教育実践の拠り所を構成していっただけに、生涯忘れがたい会である。千葉大学を離任するに際して、それまでの総括にと黒岩久雄君（人文学部：現千葉県看護学校教諭）と山本勇君（教育学部；当時、フリーター）一両君とも6年間の会員一が中心となり、『千里』（ちさと）という会録（図

千里

教育臨床研究会々録
1975.7.

図1：『千里』の表紙
千葉大学教育臨床研究会々録

1)を発行した。この中の構想を章立てをして、ある出版社に企画して持ち込んだが、商業ベースに乗りにくいとみてか、断られたのは残念であった。

④学生相談の紛争：私が臨床心理学の専門家、カウンセリングの専門家であるということで学長から「学生相談教官」を委嘱された。当時、千葉大学では新入生全員にMPI（Maudsley Personality Inventory；モズレイ性格検査）という標準化検査が実施されていた。これは当時、人文学部の大山正教授（現：放送大学）らが標準化されたものであり、研究資料として学部ごとの特徴を把握するために実施されていた。また今後学生が相談にやってきた場合に、改めて実施しなくてもよいようにということであった。しかし昭和47年4月から、これが当時の“保安処分粉碎千葉大学共闘会議”→“MPI粉砕背番号制導入阻止連絡会議”；“千葉大学部落解放研究会”の反対運動、それに“成田闘争”の運動団体の目に止まるところとなり、学内で問題になった。我々はビラに書かれ、私の研究室にもその運動団体が押しかけてきてよく討論をしていた。“大衆団交”というほど大げさではなかったが、かなりの頻度で討論集会が続いた。昭和48年1月23日に学内では、学生部長が学生相談

教官会議を招集し対応を協議した結果、MPI共闘会議に対し、最終的には「学生相談の一環としては、1. i : モーズレイ検査は実施しない, ii : これまで得たモーズレイ検査用紙は廃棄すること, 2. 詳細については、近い将来何らかの方法において見解を公表する。3. 今後は過日のような形での会談には応じられない」と回答し、「ただし、所管事項に関して話し合いをしたい場合は、その旨を事前に学生課に申し出ること、学生部長としての仕事のスケジュールにのせて、誠意をもってこれに応じる用意があること。」を決定し、公示した。その後、保健管理センターが設置されることもあり、大学側は学生相談制度を廃止することを決定した。つまり学生相談の窓口を閉じることとなった。しかし、この学生相談制度の廃止に関して、教育学部教授会は異議を唱えて学長に決議文書を提出した。この“事件”は、当時全国の各大学の学生相談において実施されていた心理検査のありかたに波紋を投げかけた。ちなみに学生部が全国の大学に対して、精神衛生検査を実施していることを調査したところ、63大学中、47大学が何らかの心理検査を実施していた。京大の私の恩師倉石先生（学生懇話室長兼任）は「田畑らのやり方がおかしかったからだ」と考えられていたが、そうではなかった。当時の時代状況は、反権力的で、時代に反旗を掲げ、それに立ち向かう学生の若いエネルギーに洗礼を受けたということである。

これらの運動に親派の学生が、昭和49年9月に開催の日本教育心理学会第16回総会（委員長：竹内長士教授）を開催した際にも、黒ヘルメットをかぶって集まって示威運動を行ったが大きな混乱はなかった。紛争を経験していない会員は脅威を感じたり奇異に感じたようである。

これ以降、私は学生との討論会には単独で立ち向かうよりも、一人でも私の側にいて支えてくれる人（指導の学生でもよい）が存在するということがどんなに助かるかを体験した。その後、エンカウンター・グループを実践するようになって、このことは重視するようになった。一度、抗議する学生が激しい怒りをぶっつけて私の研究室の机を激しく叩いた際に、“心理的なショック”を受けていたのか、半年後に腎盂炎を患って医者通いをした。最初に近所の医院に通った際に、とにかく身体がけだるく、ベッドに這い上がるのがやっとであった。医師は「あんたは頭が鈍いのと違うか!？」と言われたのもショックであった。心ない医者へのひと言で、医原性疾病も生じることがあることもしみじみ体験した。それからしばらく大学病院・内科に通院し、ようやく快癒していった。実家が薬局を営んでいる学生など、高価な朝鮮ニンジン（ノコギリ）の顆粒を送ってくれた者もあり、疾病のおかげと感謝した。

⑤科学研究費による研究：奨励研究と総合研究（“四宮科研”）

1 教育実習体験の形成過程に関する研究：これは私が個人研究として、昭和45年度文部省の科学研究費・奨励研究に応募申請して、採択されたものである。それまで博士論文で取り組んでいた個人研究テーマである心理治療関係の応用編であり、教育実習に出向く学生が、実習の事前、実習中、実習の直後の3状況で、どのような教育体験を形成するのか、4年制の学生と2年制（短期大学）とで、どのような差異が見られるのか、などを研究の目的とした。結果は、田畑ら（1973）にまとめた。最終的には『教育実習の体験目録』を作成したが、標準化するところまで行かず中断している。

2 教員養成大学・附属学校における教育実習改善のための理論的・実験的研究：これは、教育心理学研究室の四宮辰教授（附属小学校長）が研究代表者となり、昭和48年～昭和49年度の2年間の継続研究計画を申請して採択されたものである。主として附属小学校をフィールドとして行ったものであるが、私の分担は前年の奨励研究において取り組んだ「教育体験の形成過程の研究」を発展させていった。これは名古屋大学に転任してからも、中学校、高等学校に実習に行った実習生のデータを収集し、蓄積していたが、また臨床心理学の方に力点が移っていったために、データ収集の途中で中断している。

⑥6年間に住宅を3遷：ここでは住宅事情について記述するが、一口に言って大変な苦勞をしたということに尽きる。大学教員が新規採用や新任地に赴任する際に、迎える大学側が住宅を世話するのは自然である。我々の場合は、関西地方から関東地方に移動するという国内での“異文化圏”への転入である。当時、教育心理学研究室の主任教授竹内長士先生には、その点で大変ご苦勞をおかけし、実働していただいた。最初の家は、毎日新聞・千葉支局長H氏宅を拝借した。新聞社支局長は、管理職のために支局社屋に住居を構えなければならないとのことであった。住宅街に一戸建てで芝生の庭もある一軒家であった。そこで一度正月を迎えることができた。上の息子とよくボールで遊んだり、芝生の手入れをしたりした。

ところが半年も経過した頃に、この支局長が急遽東京本社に配置換になり、この家を空けなければならなくなった。子どもたちは、まだ3歳半と1歳半過ぎであったから、子守りもしながらの引っ越しで大変であった。

2度目の家は“畑の中の六軒家”と我々が呼んでいた、ある農家の持ち畑を住宅地に転用した2Kの新築家屋であった。しかし転居して住み始めたある日、水道水が出ないことが判明し、大家に働きかけて農作業に使う

井戸から水を汲み上げて、台所用に使うようになった。これが大変で炊き上げたご飯が微妙にガリガリする。これを妻が大家に伝えると、ある日その家を建てた建築屋が怒鳴り込んで来たという。子育て中の妻はすっかり参ってしまい、これではいけないと思い、朝夕の通勤途上にバスの窓外に見ていた大学所有の元留学生寮務主事の宿舎で空き家になっている平屋住宅に目をつけた。当時、寮務主事は留学生が毎晩のように苦情を申し出てきて、ノイローゼになったために引っ越しをし、空き家になっていた所である。私は背に腹は変られず、戸村正義という事務長に直訴した。事務長は憲法を専攻したという人で、私の状況をよく理解してくれ、大学本部管財課に掛け合ってくれた。最終的には入居が認められ、今度は大学に自転車通勤できる距離になった。そこは茫々とした畑もあり、私は昔の経験を生かして鎌で草刈りをし、スコップや鍬で畑を開墾して野菜畑に改良し、気分転換に割に多くの季節野菜を作った。子どもたちは近所の公務員宿舎団地の幼稚園仲間とよく遊び、「秘密基地」も作っていた。家の部屋数は台所や風呂以外に4室もあり、8畳の居間、書斎、客間や子ども部屋も取れ、広々としていた。ここには千葉大学時代の最後まで居て、学生たちもよく遊びに来ていた。家族もすっかり安定した。

3. 名古屋大学時代 (昭和50年8月～平成15年3月)

縁あって、名古屋大学教育心理学教室の精神欠陥学講座(後に精神発達障害学と改名)及び臨床心理学講座・丸井文男教授の下の助教授に採用され、就任した。

私が京都大学大学院学生時代や助手時代には、従前から両校で往き来する“教育心理学教室交歓会”というのが行われてきており、教育心理学についてのシンポジウム・討論会、ソフトボール大会、懇親会などが持たれていた。名古屋大学に親近感を感じてきていたし、教室の教官方や大学院学生の皆さんの多くと面識があった。名古屋大学教育心理学教室は“規模の大きさ”が5講座半であり、講座費の規模も大きくて、ある助手など交歓会のスポーツの部のソフトボールの試合で打者のサード・ゴロが飛んできた際に転んだが、その後の懇親会で「サード・ゴロの際、一瞬教室予算をどのように使うかを忘れることができた!？」と言った。また“教室共同体”の雰囲気の良いは、外側から見ても憧れたり、羨ましくも感じていた大学・学部への赴任であった。

着任してから27年目を過ぎ、名古屋の地はわが生涯で最長年になり、“第2の故郷”という観がある。わが家の家族員である二人の息子たちも、当時小学1年と3年であったが、高校を卒業まで同居した後、現在は家を離

れ、独立して久しい。二人ともすでに30代半ばである。

以下に、名古屋大学時代は、27年以上の長期になるので全体を3期に分けて述べることにする。

i : 前半(昭和50年8月～昭和60年3月) :

着任してから後期の授業は少なく「臨床面接法実習」「教育心理学実験演習Ⅲ」、そして大学院の「臨床心理学研究—治療関係論」の3種であった。大学院の授業を初めて担当して、大学院大学にきたという実感と緊張を感じた。この他“ネーベン”として村上英治先生の紹介で医学部附属看護学校に非常勤で「心理学」を講義したが、そこではカウンセリングも教えて欲しいという要請があった。なお引き続き8月から10月まで千葉大学と併任し、前期授業の続き講義や期末試験にも通った。

①就任講演：名古屋大学教育学部では、新たに着任した教官(助手は除く)は慣例として“就任講演”なるものが行って来ている。私は着任した年の10月24日に行った。これは名古屋大学への“イニシエーション(=通過儀礼)”と感じた。教室主任の丸井文男先生から紹介され、先生は私が「日本臨床心理学会の学会賞を受賞していること」にも触れて下さり、嬉しかった。会場は教育学部第1講義室であった。学部2年以上の学生、研究生や大学院学生が来てくれた。教官では学部教官以外に、文学部・辻敬一郎先生をはじめ、環境医学研究所・荻阪良二先生(前：京都大学教授で恩師の一人)も来てくださっており恐縮した。特に荻阪先生は最前列のほうに陣取っておられ、余計に緊張した。先生から講演の後に聞いたが「君が興奮状態のとき、眼球がどのように動くかを観察しようと思った」と言われ、知覚の研究者である先生らしいというか、面白い見方もあるものだと感じた。講演は『カウンセリングの実践と研究から学んできたこと』と題して「実践してきたこと」「実践の過程で感じてきたこと」「実践的研究で明らかになってきたこと」などを講演し、まとめとして「カウンセリング機能に、人間存在様式の叡知を教わり、目を開かされて来ている。今後も、未知の領域へと努めて生きていきたい。お返しをしていくことが私の使命だと感じている。」と結んだ。

②学位取得後の実践研究の展開；来談者中心療法の第3段階：これは私の個人研究のテーマである『心理治療関係による人格適応過程の研究』の“ポスト・ドク”の展開である。早速、その翌年の学部紀要に「一不安神経症青年の心理治療関係と治療的人格変化」をまとめて一本投稿した(田畑, 1976)。この事例は私が前任校で実施の学生相談の事例で、TPIのデータ(図2-1)があること、3年4ヶ月も長期継続したこと、『心理治療

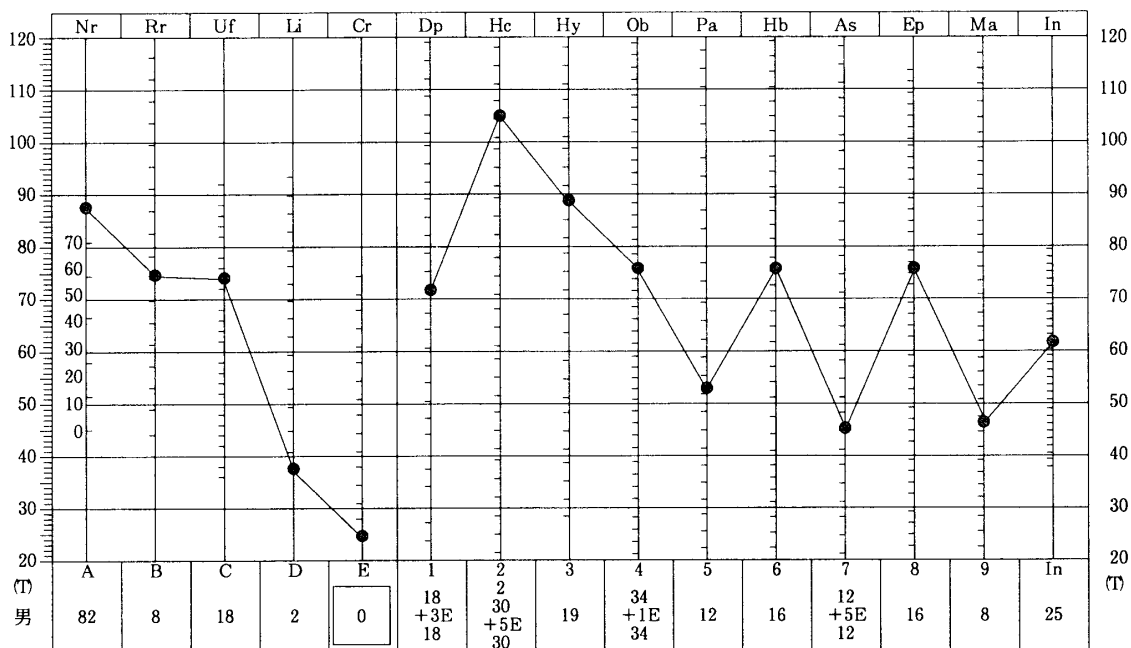


図2-1 男子青年のTPIの結果

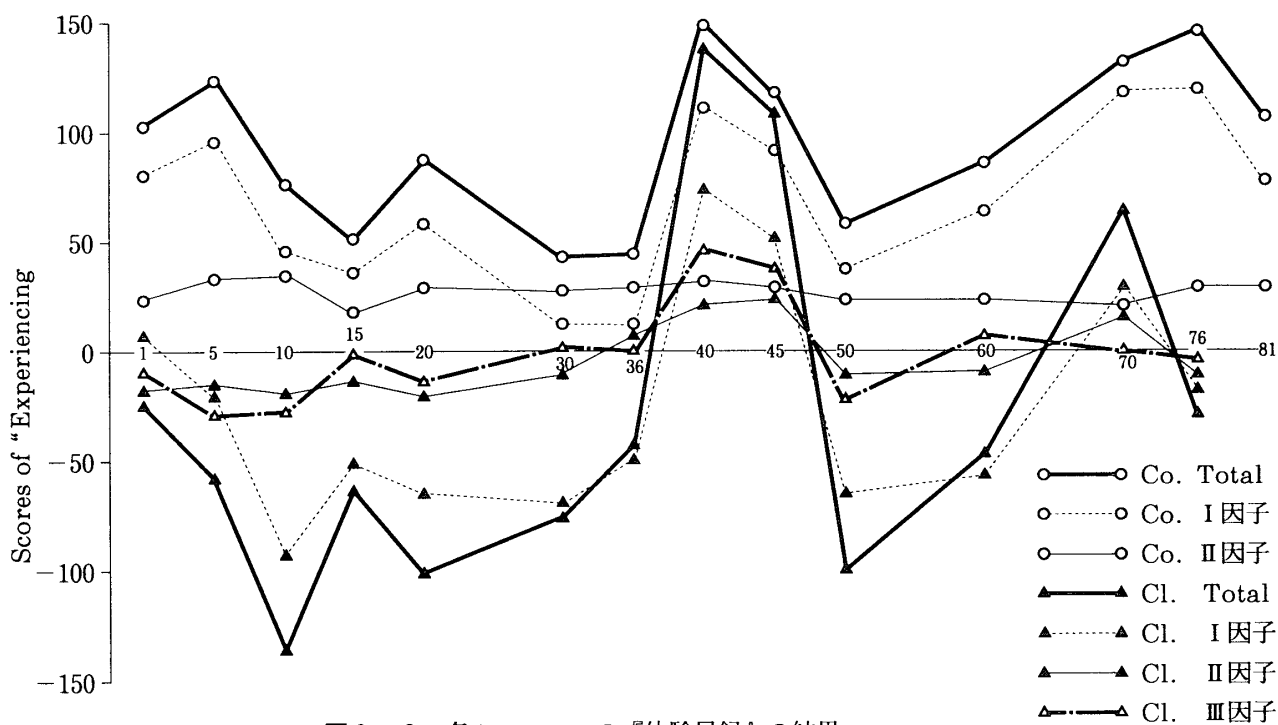


図2-2 各セッションの『体験目録』の結果

関係の『体験目録』をセラピスト-クライアントに実施した資料があること等で意義があった。図2-2に実施した『体験目録』のセッション毎の結果を示した。これで分かるようにクライアントとの治療関係は初期には関係が遠かったが、次第に良好になり面接の第50回、55回目の頃には、私の学位研究の独自の発見である“波状様の展開の曲線”のピークを呈し、関係が“蜜月期”をなしていたが、それ以後は関係が再び掛け離れていった。

そして最後には卒業し、帰省したために中断し、クライアントは最後の81回目の『体験目録』を記入していない。なお『体験目録』を加味しての研究は、この事例が最後の事例となった。

名古屋大学に就任してからは、これまで通り相手の了解を得て録音記録は取らせてもらうが、他は『体験目録』は実施せず、“素手”で面接をするだけのものに変化していった。そして一事例ごとに、丹念に実践過程の研

究をしていくという“臨床事例研究”をすることをやっていった。名古屋大学に来て、初期に出会った事例は夢子さん（仮称）で“個”から“普遍”へ、という問題を考え、啓発させられる貴重な事例であった。盛んに夢を見ていたこの事例から、親・子の血縁から切っても切り離せない深い確執、愛情のかけ違いと受取り違い（その誤解から憎悪に満ち満ちていた）、異性に生きるという意味、女性としての自分捜しの問題、養護施設で働くことの意味、親との和解・親孝行ということ、結婚し、ひとの子の親になるということ、現代社会や自然が汚染されてきていること、人間らしく生きるということの探究などを教えてもらった（田畑，1977）。

この時期は、私が千葉大学時代までに継続していた“量的・客観的研究”から、第3段階の“質的・実践的研究”および“自分のものを展開する研究”と位置づけられる。つまり、これ以後はそれらの知見を生かしながら、単一事例ごとに丹念に聞き取り、治療過程に密着しながら、経過をまとめ、考察をしていくという手法に変化していった。

③共同研究：カウンセリング研究会／臨床青年心理学研究会の主宰：名古屋大学では、教育心理学教室の教官陣はそれぞれ独立の研究グループを主宰しておられた。臨床心理系では、丸井文男教授・蔭山英順助手を中心とした“自閉症研究グループ”，村上英治教授を中心とした“重度障害児療育グループ”があった。これらのグループ研究の相手（対象）になる年齢段階は、主に心身障害、発達障害、情緒障害の乳幼児や児童、あるいはその保護者であった。私のこれまでの臨床経験では、相手の年齢段階はどちらかというと思春期、青年期；中学生、高校生、大学生の事例に多く会ってきていた。そして臨床心理相談室にも、そのような年齢段階の問題（主に不登校の問題）で悩むクライアントが結構多く来室していたことから、大学院学生、学部研究生などからも、カウンセリングや心理療法の学習をしたい、教育・訓練を受けたいというニーズが強かったと感じていた。

1 カウンセリング研究会：カウンセリングの実際の学習ないし集団での検討会をするようになった。私も加わったカウンセリング研究会の創設である。これは、かつて私が京大時代に経験し、受けてきた訓練を意識しての“プラクティス研究会”に近い“実践主体の研究会”であり、千葉大学時代の“教育臨床研究会”をイメージしたものであった。当時カウンセリング研究会は既にあったが、“ドングリの背比べ”のようなグループ活動であった。つまり仲間内でお互いに慰め合い、助け合うという感じの取り組みであった。“傷を舐め合う”イメージの会は、よくいけば良いが、悪くいけば仲間同士の“対

立・摩擦”を生み出しかねない。学習主体は、学部研究生や大学院学生であって、いわば“思春期的な課題”——“対人恐怖心性”“親子間葛藤”など——を持ち越してきていると思われる節が見られた。

私は、クライアントと“良好な関係”を作り、援助をしていくこと、そして効果的な成果を生むことが、心理臨床家の最初にして最後の仕事であるということをもっとも端的に教えてくれたのが、“来談者中心療法”であり、その創始者のC. R. ロジャースである。そのためには、自分がどのような面接を実際に行い、かつそれを自分がどのように受け止めているか、さらにそれらを踏まえてどのくらい自分の中で吟味ができているかを検討するには、面接を行う際に録音し、その後に一語一句を逐語記録に直して再検討することが、クライアントに良い結果をもたらすと考えてきている。1回の面接を“木と森”に譬えれば、“木”をよく見ることに当たろう。1回の面接の中で、クライアントが語る言葉、言葉以外の表情、声の調子、仕種や動作などから、どのようにそれらの意味を受取り、どのように応答姿勢や応答の言葉を返していくか、関わる方はクライアントから教えてもらっているはずである。つまり一本一本の“木”を見ながら、“森”という一個の人間全体の生きる様子を伺わせて貰うのである。理解する（under-stand）とは、相手の“下側に立って”教えてもらうのである。決して“横柄に立つ”（over-stand）のではない。このような視点で相手に臨むのであるが、私自身はカウンセリング研究会の長い歩み・歴史の中で、初期にはかなり強く上から指摘したりしてきた。しかしそれに耐えられなかったメンバーは去るしかなかった。

この研究会で初期には毎週続けて来ていたが、その後はいつ頃からか2週に1回になってきている。これは今日の表現では「グループ・スーパービジョン」ということになる。訓練中の大学院学生が求めてスーパービジョン機能をもつ研究会に所属していくことは、クライアントへの説明責任を果たすことを意味している。

なおこの研究会で初期にリサーチとして、あるクライアントとの面接過程で生じた“質問の内的意味”，“沈黙の内的意味”を検討して、学会で伊藤義美（当時大学院学生、現：大学院環境学研究科）と連名で発表したものなどがある（田畑、伊藤；1978, 1979：東海心理学会、日本心理学会、日本カウンセリング学会など）。

2 臨床青年心理学研究会：これは、従来の青年心理学が一般的な青年発達の心理学であるということへの批判的な視座に立ち、むしろ現実に悩み、かつ生きている青年クライアントの“個”の生き方、青年の自己確立、

社会との対決、治療者のあり方などについてリサーチすることを目的とした研究会であった。メンバーは当時すべて大学院学生や学部研究生であった。池田博和（現：愛知学院大学）、生越達美（現：名古屋学院大学）、伊藤義美（現：名古屋大学環境学研究所）、間宮正幸（現：北海道大学）、江口昇勇（現：愛知淑徳大学）、鶴田和美（現：名古屋大学学生相談総合センター）と私を加えた7名の男性青年グループであった。私は、密かに映画監督黒澤明の“七人の侍”をイメージしていた。生産的に取り組んだ研究の成果は、学会や紀要にまとめて発表してきた。これらは、「臨床青年心理学序説」（田畑・池田ら、1977）に始まり、その後「臨床青年心理学研究（X）—青年期治療の内的視点—」（田畑・池田ら、1982）までおおよそ10編を紀要に発表してきた。

その後、女子青年も視野に入れての研究を進めるために、女性メンバーも数名が加わり、さらに発展させて、合宿研究会も行っていた。しかし研究会はメンバーが増えればそれだけ運営が大変になる。幹事や世話人を立てないと事務的な連絡など手が行き届かなくなった。

なおこの研究の関連テーマで、1980年度の東海学術奨励賞（中日新聞社）の助成を受けることができたことは励みになった。その他、文部省の科学研究費助成の申請をして研究費の確保をしようとしていたが、結果はうまく行かなかった。

④臨床心理相談室のこと：

1 相談票・相談記録票の整備：これについては、まず“物構え”として、『相談票』等の整備をしたことを記録して残しておきたい。既に、③において言及したが、当時は『教育臨床研究所記録票』があった。来談者では幼児・児童が多かった。そのために、当然であるが『相談記録票』は「幼児・児童用」と「青年・成人期」の2種類が必要であった。青年や成人の来談者には“生育歴”を聞いていくことはあまりしない。「幼児・児童用」の項目内容には、誕生時の両親の年齢、妊娠中の状況、出生時の状況、誕生後の発育状況など記入する欄があるが、「青年・成人用」では、そのような事は本人には記憶が少ないし、相談内容には直接あまり関係がない事である。そこで我々は手分けして、他大学の相談票、病院のカルテ記録票、教育センターの相談票のサンプルを集めた。そして有志のメンバー（大学院生の後藤秀爾；現：愛知学泉大学）らと「相談票作成検討委員会」を組織して検討していった。その結果、今日まで使っている“定版”が出来上がった。その相談票で一番参考にしたのは、広島大学教育学部心理教育相談室の「青年・成人用」である。これらの研究機関、専門機関に感謝したい。

2 ケースカンファレンスについて：これはすべての

教育研究機関、専門機関では、その社会的責任を持っており、説明責任を果たすために実施してきている。毎週金曜日の午後5時半から始め、午後9時まで行っていた。また月に1回は「臨床リサーチ会議」も持たれていった。手元にある記録によれば、昭和51年度は、教員4名（丸井、村上、田畑、蔭山）、大学院学生7名、修了生で他機関勤務者7名、学部研究生10名、学部準スタッフ4名、事務職員2名と、多くても34名という所帯であった。ケース会議は“臨床棟”の第3心理演習室で、始めから終わりまで一堂で行っていた。帰りには、こつてりと勉強をしたという感じになっていた。

教官では昭和54年度から蔭山助手が名古屋大学医療短期大学に助教授で転出され、新たに池田博和助手が誕生し、昭和58年度まで教官は4名体制が続いていった。しかし昭和59年度からは丸井文男教授が、愛知教育大学々学長に転出された以降は3名で運営され、昭和60年までこの状態であった。その後、蔭山先生が再び助教授で返り咲いて、教官は4名体制になり、これらの教官4名で『臨床心理相談室』の運営は続けられた。

なお大学院学生も、これら『心理教育相談室』を持つ京都大学、九州大学、広島大学、東京大学の4大学と「5大学事例研究会」を持ち回りで開催する事になり、他流試合や意見交換ができる機会になっていった。

3 省令外で附属施設に認可される準備：医学部附属病院に匹敵すること：教育学系の大学院を持つ8大学の教育学部長会議で、かねてより運動が行われていたが、その成果が文部省に認められることとなり、「心理教育相談室」が京都大学に昭和55年（1980年）をトップに、九州大学に昭和56年（1981年）、広島大学と東京大学に昭和58年（1983年）と、文部省から省令外で認可されることになった。わが名古屋大学だけは、作戦が一寸誤って（＝「臨床心理相談室」の名称で申請した為）、2年遅れて、結局昭和60年（1985年）から認可される運びになった。省令外とは建物や人員は増加しないが、臨床心理の専門家の養成に来談者から有料で相談をすることを国（文部省）が認めたことを意味する。名古屋大学は、先行する4大学に続いて、昭和60年4月から認可されることが確実となり、そのための準備を内・外に対して行うことが必要であった。徴収する料金は国庫に収めるめるというシステムであった。その見返りとして、運営費が交付されるということとなった。

⑤学生相談室研究会議とグループ・アプローチ；学生相談室員兼任：千葉大学時代から学生相談に関わっていたこと、“心理テスト紛争”に遭遇していたことなどから、昭和51年から私も希望して国公立学生相談研究会議のメンバーに加わった。そして1月中旬の祝日・成人の

日前後に開催される研究会議に出席するだけでなく、そこでテーマになっていたグループ・アプローチにも加わるようになった。後者は名大では「自己（再）発見のための合宿セミナー」を文部省の厚生補導特別企画に学生部・学生相談室から申請し、その補助を受けて実施してきた。私は、第1回から第19回まで、2回分（第13回目は在外研究中）を除いて、全部参加をした。

ここでは、かかるグループ・アプローチについて言及しておきたい。グループ・アプローチでファシリテーター（促進者）を務めるには、自分自身がメンバー体験を少なくとも100時間は事前に体験しておくことが肝要である。私は学生相談研究会議主催のものに3回連続して、2泊3日実施の“グループ”にメンバーで参加した。九州大学の安藤延男・村山正治両先生の世話での九州・久住の小松地獄温泉近辺の九州地区国立大学共同利用研修センター、愛媛大学の福井康之・砂田良一両先生の世話での瀬戸内海・中島の同大学臨海実験所、そして山形大学の末廣晃二先生の世話での蔵王温泉の民間宿泊施設で、それぞれの企画に参加した。その体験は、初期には学生相談の主（ぬし）や侍（さむらい）ばかりで、戸惑うことが多かった。しかし、回を迫る毎に次第に身を置いていく態度や要領も身につけていき、“グループ”が面白いものになっていった。ファシリテーターやメンバーの人柄をより身近かに感じるようになっていった。その後、さまざまな学会や会議でも会って心強い感じがした。

⑥国際会議への参加：

1 第XVII回国際心理学会議：昭和55年（1980年）7月4日から7月20日まで、この会議出席とヨーロッパの臨床心理学関係機関の訪問及び心理療法に関する資料収集のために外国研修旅行に出かけた。この旅行のツアーリスト・リーダーは「文化と人間の会」代表の星野命教授（ICU）と詫摩武俊教授（東京都立大学）の二人であった。東ドイツ（当時）（ライプツヒヒ＝心理学会議7/6～7/12 一会場はマルクス・レーニン大学（旧：ライプツヒヒ大学））であった。その後ワイマール＝ゲテ・ハウス、シラー・ハウスなど、ドレスデン＝ツヴィンガー宮殿、西ドイツ（ヴュルツブルグ＝ヴュルツブルグ大学、ミュンヘン＝マックス・プランク研究所・児童精神医学研究所）、オーストリア（ウィーン＝フロイト・ハウス）、スイス（チューリッヒ＝ユング研究所、D.カルフ・ハウス）、フランス（ニース＝ニース海岸、グラス溪谷；パリ＝サルベトリエール病院、サンタン病院＝とりわけシャルコー記念館、ルーブル美術館など）を歴訪した。私は生まれて初めての外国旅行であったが、好奇心や感動と失敗、各土地の文化への接触、カルチャー・ショックなどの連続した旅であった。

心理学会議の開会式は、ライプツヒヒ・オペラハウスで行われ、文化イベントとして“ライプツヒヒ・ゲバントハウス・オーケストラ”の指揮者マズアー率いる演奏で、i：R. シューマンのピアノ協奏曲（女性ピアニスト：A. R. シュミット）、ii：L. ベートーベンの“交響楽 No. 5 運命”を聴き、まさに魅了された。演奏終了後に、指揮者が天を仰いで神に感謝するような動作がとても印象深かった。これらは帰国後8月16日に教室で帰朝報告（田畑、未刊）をした。私は旅行先のホテルで、同室宿泊者に英語とドイツ語で譚言を言っていたということを聞いたから、相当な心酔ぶりであった。

2 世界精神衛生連盟会議：また翌年、昭和56年（1981年）7月27日から8月1日にかけて発展途上国では初めてというフィリピン・メトロマニラでの世界精神衛生連盟会議に参加した。当時はマルコス大統領の政権下での開催であった。2日目の夜分にマラカニアン宮殿でのパーティーが開催されて、各国の代表有志が招かれ、“豪華な、権力の宮殿”でのディナーや催物を楽しんだり、ファースト・レディーのイメルダ夫人とも英語で口を利いたりした。会の後でホテルの同宿者は“贅沢をしている”とボヤいていた。会期中に日本から公費留学をしていた若手研究者・渡辺文夫さん（上智大学大学院生：現上智大学）に案内されてマニラの低階層の住宅街を視察したり、日本からの参加メンバーの知人の招待で裕福な民間人の自宅に招かれ、訪問したりした。このほかに会議中のイベントとしていくつかの精神病院なども視察をしたり、UP（＝フィリピン大学）も視察したが、通された部屋は蒸し暑くてクーラーの音ばかりが大きくて大変であった。これらの経験で貧・富の格差を痛感した。会期中に意識的に“夢”を手帳に記録していたが、結構面白い夢を見ていた。

3 世界社会精神医学会：これは、昭和58年（1983年）9月6日から9月8日まで、国内の大阪市西区・佼成会の普門閣で行われた第10回世界社会精神医学会（大会々長：大阪大学医学部金子仁郎教授）で、シンポジウム「比較文化からみた同一性の諸問題」のセッションで、私の臨床経験に基づき男・女の青年事例を発表した（田畑、1983）。

ii：中盤（昭和60年4月～平成元年3月）

①省令外附属施設・心理教育相談室の発足：昭和60年4月8日（月）の午前10時過ぎに学部の会計掛から電話で「文部省から電話があり、これから有料にして良い」との連絡があったことを受けた。今でもよく記憶しているが、私の担当していた来談者は、午前10時から“無料”であったが、午前11時から“有料”になった。

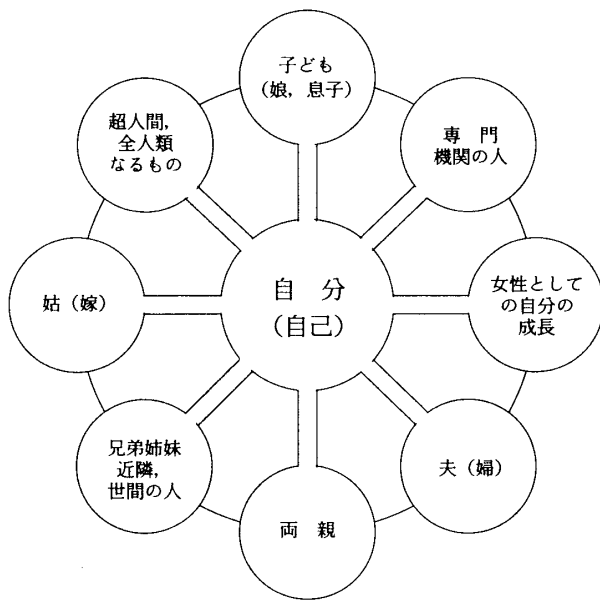


図3-1 成人クライアントへの心理治療者の目

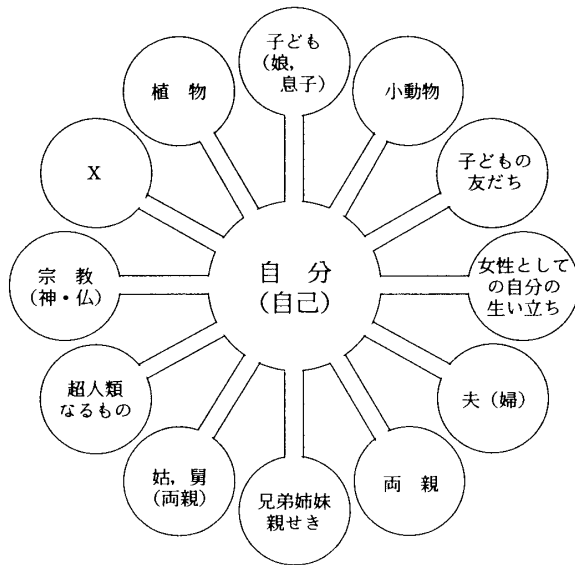


図3-2 事例C, Dにおける心理治療者の目

図3 成人クライアントへのカウンセラーの目
田畑(1986)

それ以降は、教官が行っても、教育訓練中の大学院学生が行っても、徴収する費用は同じであるから、みんなクライアントの期待やニーズに応えよう、取り組みの内実を高める努力と精進を重ねていくことが求められた。有料になってからは、さらにケース会議の内容にも検討が加えられていった。幸いに大した事故もなく、クライアントに訴えられることもなく順調に軌道に乗っていった。この時期には、スタッフは教官から、大学院学生、研究生、事務員、準スタッフ（訓練を受けることを“所信表明した”学部4年生若干名）を入れて約40名となったし、さまざまな研究会活動や研究交流（例えば5

大学大学院事例研究会）が活発に展開されていった。

なお相談室の中心になり、どんな多忙な時期でもケース会議には出席されて、範を示されてきた村上英治教授は、昭和63年度末をもって、名古屋大学を定年で退官された。先生は性格検査及び性格心理学講座の所属であり、後任に医学部専任講師である新進の本城秀次先生（児童精神医学）を平成元年4月から助教授として迎えることになった。臨床心理系の教官は4名になるが、私はその年（平成元年）3月末から文部省の在外研究でアメリカ・カリフォルニア大学ロサンゼルス校心理学部に向こう10ヶ月に亘って長期出張をする事になったので、しばらく10ヶ月は、また教官陣は3名（蔭山、本城、池田）で運営していくことになった。

②臨床事例研究—“2例”研究の推進：私は、名古屋大学に赴任してきて、博士学位研究のあとは毎日の心理臨床実践活動について、実践事例の幅を広げて行き、終結を見たものを臨床事例研究にまとめることを続けて行った。中でも、私は実践事例で、ある観点に関心を持って見ていった場合に、そこに“共通の現象”が見られることに気がついた。それがここでいうN=2の事例研究である。これまでに「来談者中心療法における夢〜」（田畑, 1977）—夢を扱うこと、「心理治療過程に現れた治療者像〜」（田畑, 1984）—夢に治療者が現れること、「児童期に母親喪失体験をもつ〜」（田畑, 1985）、「心理療法における小動物〜」（田畑, 1986）—ペットが家庭内で重要な役割を演じること、「中年期における子ども喪失体験〜」（田畑, 1988）—子どもを突然死で喪失した母親の語りを聴いていくこと—の5編をまとめた。

過去10数年來、例えば昭和52年度・文部省の科学研究費補助金（研究成果刊行費）を受けた（田畑, 1978）。しかしこれを除いて、その後は1件しか受けていない。これまで、すでに「カウンセラーの教育・訓練システムに関する研究」、「現代青年の自我の病理と治療に関する臨床心理学的研究」、「初回面接の研究」などで研究助成費を受けるようにと申請の努力したが、いずれも残念ながら選考外となり、それ以後は断念してきている。現実に生きており、悩みをもって喘いでいるクライアントに取り組み、それを臨床事例研究にまとめ上げるエネルギーや苦労は大きいし、また神経を尖らせる必要がある。それと共に学術研究費申請書類作成にも、随分エネルギーを費やしてきたが、当たらないとガッカリして再度申請するという意欲がそがれ、諦めてきている。

iii : 後半（平成元年4月～現在まで）

①在外研究での経験と視野の拡大：

1 UCLA; NRCAAMHのこと：昭和63年度の文

部省在外研究長期研究員に選ばれたのは幸運であった。“教授”になってからの長期の在外研究は困難だといった知人もいるが、有難いことであった。ただ研究出張先をどこにするかでは、随分と迷走した。最終的にはカリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下、UCLA）心理学部になった。そこに「国立アジア系—アメリカ人の精神保健研究センター」＝NRCAAMH（National Research Center On Asian-American Mental Health）が1988年9月に創設されて、その所長の S. スー教授（Stanley Sue, ph. D）がスポンサーになってくれる目度がついたので、平成元年（1989年）3月25日から平成2年1月24日までの10ヶ月間、ロサンゼルス校を中心に滞在した。現地は亜熱帯地であり、年間の気温も安定しているアメリカでも有数の観光地で、映画の町でもあり、多くの外国人が訪れる。私はアメリカは初めてであり、期待して行った。他方で、治安が悪い土地柄の故に、事故や事件には遭遇しないよう細心の注意を払った。

ただ国民の税金を使っての在外研究員であることを自覚して、個人としてだけでなく、名古屋大学という国立大学の代表として派遣されていることも自覚した。研究テーマは『心理療法・カウンセリングに関する研究』であった。出かける前に、i：外国に自分の身を置いてどんな夢を見るか毎日記録をすること、ii：自分が臨床経験した家庭内暴力（狭義の家庭内暴力で“オシン（Oshin）（仮称）”のケースを持参した）をアメリカのケースと比較検討することを目論んでいた。前者は成功したが、後者は先方で守秘義務が固く、成功しなかった。なおアメリカでは、日本と異なって家庭内暴力（Domestic Violence（DV））は、もっと広い概念である。夫婦間、親子間で振られる暴力はすべて入れられる。

国立精神保健研究センター（NRCAAMH）というのは、1988年9月にUCLAの心理学部（Franz Hall）内に創設された国立リサーチ・センターである。これは、アジアからアメリカに住み着いている人々（中国、日本、韓国、フィリピン、東南アジア諸国など）についての精神健康（メンタルヘルス）に関するあらゆる課題を取り上げるという研究センターである。またアジア系アメリカ人に関心を持つ研究者のトレーニングを促進する環境や雰囲気を提供する役割も持つ。同センターのスタッフは、心理学、精神医学、社会福祉、社会学、人類学と多彩であった。他は随時、訪問してくる研究者がミーティングに招かれて出席した。私の妻も夏休みにやって来て、センターの会議に出席し、“青年期女性の夢と箱庭の臨床事例”を発表した。

前後するが、私はその研究センターの外国人研究員の

一員として加えてもらうことになった。出発の前に、早速スー教授の元で研究を続けている日系の大学院女子学生・岡崎スミエという人から、日本の専門機関でのデータ収集について問い合わせと協力依頼があった。しかし私の経験と知識では、まだ日本ではなされていないということを返答した。1969年代からの大学紛争以降、各専門機関での診療したデモグラフィック・データは、門外不出になっているという事である。（ただし今日では、文部科学省の私学フロンティア助成による研究で、各機関のデータをコンピュータに入力して、計量的に分析する研究例は少し見られるようになってきた。）

研究センターの特定領域は、i：アセスメント—精神病理、幸福、トリートメントの結果についての信頼性と妥当性の高い測度の開発；さまざまな症状が文化間でどう異なるかの研究、精神病理の相関関係についての吟味；精神障害の浸透の疫学的研究。ii：トリートメント結果—トリートメント結果に関連した来談者、治療者、トリートメントの要因についての探索；人口学的、文化的背景、認知変数が治療者—来談者の組合せに見られる結果や治療過程に及ぼす効果；症状に及ぼす精神薬理学的行為や投与量の効果研究。iii：精神保健のシステム—精神保健のサービスの利用状態と終結に関連する諸要因の研究；異なるタイプの精神保健プログラムが来談者に及ぼす影響；精神保健システムに入っていく来談者の縦断的研究；精神保健のトリートメントにかかる費用と恩恵などであった。

私は、同研究センターのチームリーダーの一人であるUCLA・精神神経医学研究所の J. ヤマモト教授（精神医学）には、滞在中公私とも大変にお世話になった。ちなみに同教授の夫人は私の郷里・山口県大島の檀家寺の住職夫人と従姉妹同士であるということが長旅に出る前に、墓参した際に住職夫人に会って挨拶していて判明した。まさに“仏縁”だと感じた。滞在中には、同博士の診療室でクロスカルチュラルな臨床にも立会い、DSM-IVでいう“Gender Identity Disorder”（性同一性障害），“PTSD”（心的外傷後ストレス障害；田畑は1991年に日本での課題を紀要に紹介），“Malingering”（詐病）のケースにも触れた。1週に2～3回も面接するという異文化体験をまざまざと経験した。英文で記録をまとめるのはシンドかったし、面白かった。

2 国際応用心理学会議での発表：リサーチセンターでの活動は、オンラインで結ばれたデータのコンピュータ入力の作業が主要な仕事であったが、私は自由にしてもらい、結構UCLAの学生相談室や心理クリニック、J. ヤマモト教授の診療室、ガーデナ地域の精神保健センターなどにも出入りをさせてもらった。そこでの臨床

にも立会い、週に2～3回の面接を行うことが普通であることも驚異であった。自己訓練のために英文で記録を作り、博士にその都度提出して貴重な経験をした。(帰国に際し、Laboratory For Cross Cultural Studies, UCLA Neuropsychiatric Institute: Osamu Tabata, Ed. D. Visiting Scholar Participating in cross-cultural seminar work, patient evaluation and therapy. August 4, 1989～January 19, 1990. Chief Joe Yamamoto, M. D. の Certification・証明書をいただいた。)

帰国の年の秋口、1990年9月に日本の京都で開催される第XII回国際応用心理学会議には、私がロサンゼルスに滞在中にまとめたものを発表する機会になった。これは午前と午後に2つのシンポジウムで英語で発表し、英語でやり取りするというもので、生涯で初めにして、最後になるかもしれないと考えられる(Tabata, 1990a; Tabata, 1990b)。

3 夢日記：これは、カウンセリング・心理療法の専門家として、自分自身が海外という異文化の中で、どのような“精神生活”が映し出されるか、楽しみに待ち受け、記録するという作業である。私は年齢が49歳で“単身赴任”した身で四苦八苦しており、もともと教育分析を受ける勇気や心積もりはなかった。(今なら、その逆に“快になる”と考えられるが。)

毎日、枕元にメモ帳と筆記用具を備えておき、夢見をしたと思う時点で、キー・ワードをメモすることを実行した。朝起床した後、自宅あるいは大学研究室に出かけて、より詳しく綴り、さらにキー・ワードから浮かぶ現実の出来事を連想したり、全体の印象をまとめることをした。一日一ページを毎日続けて300数ページが溜まっていった。

日本を出発する2週間前に残務整理で多忙を極めていた時期に、初めて海外の風景の夢を見た。それは「カリフォルニアと思われる広い草原一面にポピー(=カリフォルニアの州花)が咲き誇っている」というものであった。これは未だ見ない異国の地への“憧れの夢・願望夢”であろうか。現に3月末にロサンゼルスに着き、ホテルの庭や大学の花壇に沢山咲いているのを発見して、その色といい、可愛さといい心が和む気がした。(私は子どものころ、田舎で自分の山地の畑の畦道にヒナゲシの種子を買ってきて育てたことがある。)

夢は、不思議に大学の研究室そのものは出てこないが、マイカーでフリー・ウェイをドライブする夢、少年時代に過ごした瀬戸内海の島々の夢などをかなり頻回に見た。前者は、私が当時6月頃、ロスでは車がないと日常生活にも研究生活にも不便だと感じて、生まれて初めての、

本気で習得しつつあった普通乗用車の運転練習中および免許取得後に恐る恐る乗り始めた時期の夢である。もし自動車事故の夢を見たら、その日は乗ってはいけないと考えていた。後者の夢は、夏休みも終えて、家族も、診療所でのクライアントもみんな去った後の9月から秋にかけて見た夢である。この夢を日系のリース・幸子・滝さん(ロスで開業：ユング派分析家：臨床心理士)に、ある日話したら、「それは当然ですよ。タバタさんは日本人ですもの!?’といわれ、苦笑するやら、安心するやらであった。この免許取得の訓練とカウンセラー訓練との対照をしたものがある(田畑, 1996)。

実は、この宝物にしていた夢日記を後生大事にしていたばかりに、最後まで手元に置いていて、帰国直前に船便で送ったのが大失敗であった。帰国して配達された際に、日本から履いていった黒の皮靴も、何と片足分しかない。私は、それ以降当分の間は、自分の分身や家族を失ったような“大きな喪失体験”を味わった。そこで夢の分析や臨床研究で日本では代表的な河合隼雄先生(当時：京都大学教授；先生もかつてUCLAに大学院生として在籍されていた)と鎌幹八郎先生(当時：広島大学教授；滞在中にロスを訪ねてこられたことがある)に話したら、それぞれ“個性的な応答”をして受け止めて下さり、少しは気分が楽になった。

ところで、本稿を書くために自宅に保管してあった『ロサンゼルス生活』のファイルから、送付した日記以後の日記(平成2年1月17日から2月13日《最終記録》まで)が出てきた。

帰国前の1週間を切った、1/17の夢は、朝8時15分に記録：「何か外国の土地で旅行か移動する夢を見ていたようであるが、心地はよかった。“三者関係”の巴・コミュニケーションの大切さを気にしていたようだ。」(平成2年；1/17)という記述である。(＊：昨夜(ロスで)の電話で、私一速水一水野の三者が、お互いに連絡を取らなければならないということを感じていた。夢でもこれが反映していた。)当時、UCLAには速水敏彦先生(教育心理学教室教官；当時：フルブライト研究員で派遣中)と水野りかさん(当時：大学院学生；現；中部大学)とが滞在しており、昼食時や休みの日に時々往来をしていたことが思い出される。

帰国後の日記の最後の夢は「A君一平成元年3月に終結した強迫神経症青年一が私のオフィスのソファーに座っている。私は、彼と面接するためか(面接は終結していたが)、面接ソファーに座る。(以下、省略)」(2/13；帰国後1ヶ月)という夢である。私自身はクライアントの夢を見ることは少ないが、この夢は珍しいものである。このクライアントA君は、私が帰国後に訪ね

てきて、伊豆の自殺名所で“自死”を企てていたことがあったと述べたが、よくもその気持ちを表明してくれたものだ。

なお、UCLAでスポンサーになってくれたS. スー教授の夢は帰国してから見たが、面白いので記述する。帰国していつの時期かは忘れたが「沖縄で“アムトラック”のような列車に二人が乗って、沖縄の旅をしている。天候は透き通ったブルー・スカイで良好である。」というものである。夢は飛行機の音と同様に、後を追ってくるという感じがした。もしかしたら、彼らが京都での国際応用心理学会議に9月に出かけてくることと関連があったかも知れない。その後、彼は、国際応用心理学会議に同夫人と姪っ子と同伴で京都にやってくる、ロスでのお返しに料亭・下鴨茶寮で日本料理を接待した。その後、日本文化の粋である銀閣寺や三十三間堂を案内しようとしたが、暑い日で姪っ子が参ってしまい、結局、銀閣寺のみを拝観（彼らには見学か）をし、三十三間堂は中止した。銀閣寺への案内途中、道路の桜並木の木陰で、暑い中を民間経営者の駐車場への車の道案内アルバイトをしていた次男（京大法学部2回生）を会わせたら、息子が意外に流暢な英語をしゃべるのには驚いた。

②大学院独立専攻・発達臨床学専攻の誕生：この構想は、私がUCLAに在外研究に出かける前から、潮木守一学部長時代の元でなされていた。在外研究中には、潮木守一学部長もUCLAに研究出張されて来た際に宿舎を訪ねてみたら、先生も心配されて「日本に国際電話を入れてみる」と約束された。日本を離れる前から文部省の大学設置審議会に提出し、認可を受けるための私個人の“履歴書・業績表一覧”を作成し、研究室の机の引

き出しに収めて出かけていた。平成元年6月のある日の夜、現地時間の確か午後6時30分頃（日本時間：午後1時30分）に国際電話が架かってきた。留守中にこの計画遂行の実働をして下さっていた蔭山英順先生から、それらの書類作成について依頼があった。私は、当時、丁度運転免許の実技にも合格して免許取得していたが、自動車保険には未だ加入していなかった。その日に加入手続きの為に、ガーデナ市の日系人経営の保険会社に同行してくれた井手亘さん（UCLA在外研究員；大阪府立大学助手）と加入手続き完了し、祝杯を上げているところに架かってきた。蔭山先生がたには、留守中に本当にご苦労をお掛けして申しわけない、済まないという感じがした。文部省から突然に「発達とは何か？」との問い合わせがあったりしたということも聞いた。

さて独立専攻は、新しく臨床心理系基幹講座2講座、教育学系から協力講座2講座、計4講座の構成された。基幹講座は「発達援助臨床学講座」（田畑治、蔭山英順）、「家族発達臨床学講座」（小嶋秀夫、本城秀次）、協力講座は「生涯発達教育学講座」（新海英行、今津孝次郎）、「異文化間臨床教育学講座」（馬越徹⇒後に梶田正己と交代、安彦忠彦）という豪華な陣容であった。（敬称略）

設置申請の趣旨内容は、現代社会が高度化し、複雑化し、多様化し、かつ国際化してきている今日では、既存の学問体系では十分に対応し切れなくなっているというのが、わが学部共通認識になってきたのであった。

帰国した後は、修士課程の入学試験の事前準備で多忙になった。平成2年4月1日から、私が“専攻主任”になるよう、命を受けることになった。応募者は人気あるコースの為に多く、志願者も多彩であった。入学する

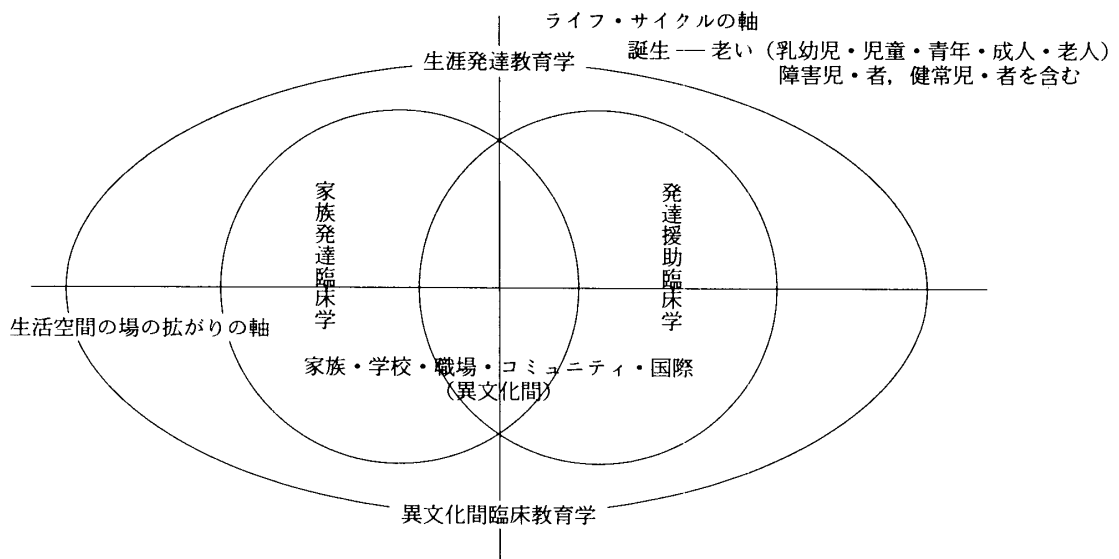


図4 「発達臨床学専攻」と「成長・発達援助」（田畑，1991）

大学院生の種別は、3種（大学院博士後期課程進学を希望する者、修士課程修了後に心理臨床領域で就職する者、心理臨床経験のある社会人の再教育を受ける者）であり、開講科目も多彩で幅広い種類があった。私が担当した必修科目「発達臨床学特論」は、アメリカでの在外研究の経験を踏まえて“異文化での生活とソーシャル・ネットワーク”“心理相談室の日米比較”“アメリカの大学院臨床心理学専攻の教育訓練カリキュラムー2つのモデルをめぐってー”なども取り上げて討議した。

平成4年4月からは、同大学院博士後期課程も認可されて、研究指導の授業は「発達臨床学コロキウム」があり、基幹講座の教員全員で研究指導を行うシステムとした。目標は、修士論文を専門誌に投稿すること、後期課程での研究を推進するとともに、博士論文を完成することとした。本専攻は、臨床心理学に関する教育訓練と実践研究を基本としている性質上、実験・調査研究を主特徴にする心理学系と異なって、実践研究を課程博士の学位として3年以内（最大6年以内）に完成することは時間も要し、困難である。しかし、ぼつぼつとその結実が見られるようになってきているのは、喜ばしいことである。今後、大学院博士後期課程に籍を置く学生に、更なる精進や奮起を促したい。さもないと、求人はあるけれども採用されないことを自覚し、旧倍の努力をすることであろう。

また記録に残しておかなければならないのは、早期の段階で名古屋大学公開講座委員であった今津孝次郎先生の音頭により『現代人の心の健康ーライフサイクルの視点からー』が本独立専攻ならびに学内関連教官13名の共同執筆で、1994年に名古屋大学出版会から出版されたことである。

③臓器移植の研究：ここ数年前から、以下のような研究に携わってきた。これは厚生省の科学研究の分担研究（班長：名古屋日本赤十字第2病院の第3外科（腎臓外科）医長・打田和治医師）に、私がある精神科医師から、通勤途中に第2日赤病院があるということで推薦された。私はもっと積極的な意味で参画してきた。ヨーロッパ・オランダのライデン大学では、社会心理学者がかかる問題に関与しているということであった。日本では、臨床心理学でもまだ関与している者がいなかった。アメリカに到着した早々に、I. D. カードを取得したり、普通乗用車の運転免許を取得した際に、“カルチャー・ショック”を受けたことも理由にある。それらと一緒に“Donar Card”が送付されてきたのであった。路上で行き倒れた場合や交通事故に遭遇して意識不明になった場合に、どのように判断するかの指針が示されている。これは一見死ぬことが前提になっているということにショッ

クを感じた。これもこの研究班に参加する動機になった。日本では、当時は未だ制度が確立していなかった。その後、研究班の成果も問われた。周知のようにそのような動きに相待まって、1997年に国会では与野党議員有志が議員立法で臓器移植法を提出し、成立して今日に至っている。その結果、切実に臓器提供を願う患者やその家族に生命維持や希望が付与されてきている。厚生省の研究は、その基礎研究を推進することであった。もう一つ密かにねらっていたのは、発達臨床学専攻学生の修士修了後の職域先の開拓も参加動機の一つであった。

この研究班の最終目標は、日本での臓器移植に際して“コーディネーター”の役割の確立であった。患者-患者家族-医療スタッフの3者の中間にあって、どういう働きかけ方があるか、その日本版のマニュアルやビデオ教材を作成することであった。大学院の指導学生も研修会に参加して、実習をしたりしたが、田畑の都合でこの実習の取り組みを公表するところまで至らなかった。この研究班の主力メンバーの一人として参加されていた精神科医師・廣田典祥先生（当時：九州・佐賀県嬉野市の国立嬉野病院々長）とも知己になった。1991年に長崎・雲仙普賢岳の火山噴火による火砕流が発生して、多くの住民や地域に被害をもたらせた。PTSDが発生している可能性があるとして、私は1994年に廣田先生にも話して状況を伺い、現地視察に訪問し、長崎県島原保健所や島原市教育委員会で研究資料を収集した（田畑，1994：「百聞は一見にしかず」）。その際に先生の病院も訪問したが「佐賀でも患者・家族が高齢化してきている。頭を悩ましている。」と漏らしておられたことが記憶にある。これは、後の高齢者との取り組みの動機になっている。

なおこの取り組みでは、田畑（1994；共同研究；1997：分担執筆）がある。またこの視察で得てきた“火山弾”は、平成6年4月から附属学校々長に就任した際に、最初の全校集会において“生命のこと”“自然災害でここを傷つけられている人々もあること”“遠隔地ではどういった支援ができるか”“意志を強くもつこと”などを話すために、壇上から具体物を提示するために、ビニール袋に入れて持参した“石”（“意志”に通じる語呂）をやおら出して生徒や教員の反応を見た。“自然災害”や“人為的な災害”においても、生命や心に傷つけられることがあることを講話した。現に、そのすぐ直後（4/27）に、名古屋空港の中華航空機墜落という大惨事が発生した。わが附属学校の高校1年のTk君の父親がその犠牲者になったことは、身近な人の“いのち”ということを考える契機になった。他者の死に悼みを表すという行為である。

④高齢者・痴呆高齢者への共同研究：

1 老親－親－孫の世代間関係と精神健康：わが国が迎えている高齢者社会のQOL（Quality of Life；生活の質）の向上を目指した高齢者家族の老親－成人（親）－孫の3世代がどのようなあり方や精神健康を示すかについて、星野和実（大学院学生：現；三重県立看護大学）や遠藤英俊（中部病院医師）らが呼びかけてくれ、“エージング研究”を組織することになった。具体的には、民間の委託研究費を受けて、高齢者を抱えた家族の世代間関係と精神健康に関する研究について、かなりの業績を産んだ（田畑らの一連の研究；1995, 1996, 2000.）。これには佐藤明子（助手：現；新潟青陵大学）、橋本剛（大学院学生：現；静岡大学）、坪井さとみ（大学院学生：元国立長寿医療研究センター研究員）他と“エージング研究会”を組織して、月1回のペースで共同研究を行い、委託団体の主催による報告会、全国学会（日本心理学会）や名古屋大学科学研究シンポジウムなどで発表した。

2 痴呆高齢者介護研究への参画：これは厚生労働省の科学研究の研究班（班長：祖父江逸郎：前愛知医科大学々長）から呼びかけられて、心理学の立場から加わった。我々は、痴呆高齢者のかかわる職員スタッフの“ノンバーバル・コミュニケーション”への“気づき”促進や解明のための基礎研究（田畑ら、2001）、痴呆高齢者にかかわる施設職員の語り（田畑ら；2001）をまとめた。その後も、この研究会はぼつぼつ進めてきていたが、この年度定年退官を期にして、一応閉じた。

⑤心理臨床の視野の拡大：待つて行う臨床活動から出ていく臨床活動へ展開：これまで、私の場合は、どちらかという“待つて”行う心理臨床活動が主体であった。しかし、ここ10数年はそれだけでなく、“外に出かけて行って”行う心理臨床活動も視野に入れていくように迫られて来ている。

1 附属学校長への任命と附属学校の運営、教員の活性化：平成6年（1994年）4月から教育学部附属中・高等学校長に選出され、就任した。丁度その前の2月頃から“腎臓結石”を起こし、体調不良気味であった。途中3月1日に生まれて初めて入院することも経験し、“体外衝撃波結石砕石術”を受けた。これも先の臓器移植の研究に携わっていたことが機縁になって、第2日赤病院の腎臓外科に入院し、加療した。校長になる前から入院して、あるカウンセラーには“校長ストレス”からだど冷やかされた。校長就任に当たり、生徒600人とその背後にいる保護者1,200人、教職員40人とその背後にその両親80名が居るということを考えて臨んだ。教職員とは、できるだけコミュニケーションを計ろうとした。

また実際に2年間で“生といのち”に関しても、いろいろな事態が生じた。校長2年間に、身内や親戚でも不幸があった（叔父の死、長男の子＝初孫の突然死など）。

当時から附属学校の存立を巡って討議がなされていた。私はできるだけ生徒や先生の中に入って“人間関係”を促進したり、維持したりすることを念頭において活動した。文部省の研究開発校への『総合人間科の開発研究』には、学部側の示唆（特に安彦忠彦教授：現、早稲田大学）もあって応募し、無事指定された。これらについては『附属学校紀要』『学会誌』など関連の発行物に記した。また学部側でも的場正美先生の尽力で平成8～10年度の文部省・科学研究費の助成も受けたことは記憶に新しい（田畑、1999. 科研報告書）。

2 外部機関でのスーパービジョン（supervision）：スーパービジョンということは、心理臨床の重要な機能であり、内部の大学院・発達臨床学専攻の学生のみならず、外部機関（例えば名古屋市教育センター）からも公的な依頼を受けて実行するようになった。外部のスーパービジョン回数は、多くはないが私の中では重視してきている。それは自分が直接相談するのは違って、また難しい面も持っているから気が抜けない作業である。でもそれぞれの取り組みを聴いていると、担当者に援助力がついてきているのを確認できて楽しみである。そういう目に見えないものが、来談者に反映していくことが大切なことである。

3 学会や民間団体からの研修会への支援：近年、学会や地方の民間団体からの“カウンセリング・ニード”の高まりに結構駆り出されてきている。これは“虚学”でなくて、“実学”が求められることであり、資質や知名度がテストされていると自覚して対応してきた。

表1には、私が一心理臨床家として、これまで関わってきた領域・場とクライアントへの実践活動の広がりを示した。今日、心理臨床はより一層の広がりや深まりを見せてきている。考えてみれば、終戦後57年を経て、さまざまな試みがなされてきたが、今日ほどさまざまな場で、“心”の援助が問われてきている時代はかつて無かった。これからも更にあらゆる人々からニードがあり、ますます期待が高まるであろう。自覚して取り組まなければならない。それが社会への説明責任である。

⑥心理臨床の専門指導者の養成：平成13年度から文部科学省の科学研究費・基盤研究（代表者：京都大学・藤原勝紀教授）を受けて、この問題に取り組んできている。大学院博士課程をもつ名古屋大学の教官や博士課程の学生の責任と使命は大きいものがある。これからは“学術的な研究者”が養成されるだけでなく、“人間の心の発達支援に役立つ臨床実践研究者”の養成も重要な課

表 1 心理臨床の領域・場とその活動 —— 田畑 (1992) を加筆・修正

場・空間	発達援助臨床学的課題領域	これまでの臨床援助の場
I. 家 庭	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達的問題 ・成人・中年の発達の課題 ・夫婦間関係の問題 ・嫁-姑関係の問題 ・三世代家族間の葛藤の問題 ・単身赴任家族, 海外派遣員の留守家庭の問題 ○ 青年期における孫・親・祖父母の相互作用と精神健康の問題 	<ul style="list-style-type: none"> 児童相談所 大学心理教育相談室 家庭裁判所 大学心理教育相談室 大学心理教育相談室 大学心理教育相談室 大学心理教育相談室
	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の行動問題 ・児童・生徒をもつ親の問題 ・学生の問題 (個人カウンセリング, エンカウンター・グループを含む。) ○ 学校カウンセリング・教員への支援の問題 	<ul style="list-style-type: none"> 大学心理教育相談室 児童相談所 教育サービスセンター 大学・学生相談室 県・市教育センター 教育委員会派遣研究生
III. 職 場	<ul style="list-style-type: none"> ・病院看護婦の教育・訓練の問題 ・デンタル・ハイジーンにおける教育・訓練の問題 ○ 妻子殺害・死体遺棄の被告人の鑑定 ・企業・産業における教育・訓練の問題 (勤労青少年育成推進, 女性能力開発など) ・精神保健相談員の教育・訓練の問題 ・少年院のグループ・カウンセリングの教育・訓練 (スーパービジョン) ・勤労青少年のウィーク・エンドの援助 ○ 悲嘆にくれる家族とのコミュニケーション (臓器移植コーディネーターの養成・訓練) 	<ul style="list-style-type: none"> カウンセリングスクール 大学病院 地方裁判所・拘置所 いこいの家・県労政事務所 県精神保健センター 少年院 いこいの家 厚生省
	<ul style="list-style-type: none"> ・危機介入活動 ・ソーシャル・サポート・ネットワークづくり ○ 中華航空機墜落事故の遺族の PTSD の臨床心理査定 (途中で中止) ・各職場の人びとのカウンセリング学習の支援・コンサルテーション ・電話相談員志願者への援助の講座 ・生涯学習の援助・システム化 ○ 阪神・淡路大震災による疎開児童・生徒への後方支援 	<ul style="list-style-type: none"> いのちの電話 大学・学生相談室 TV放送局・弁護士会 カウンセリング・スクール 社会教育センター, 市民大学, いのちの電話 大学 大学心理教育相談室
V. 異文化間 (国際)	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化間葛藤・摩擦の問題 ・精神障害にみられる文化の問題 ・帰国子女/外国人留学生/リターニーのメンタル・ヘルスの問題 ・アメリカ合衆国におけるアジア人のメンタル・ヘルスの問題 ・International Marriage (国際結婚) の問題 	<ul style="list-style-type: none"> UCLA 精神医学研究所 (病院), NRCAAMH 精神保健サービス (LA) UCLA の SPS 日本貿易会婦人部会・在ロス日本領事館

○ 印は最近のもの

心 理 臨 床 の 道

題であると認識している。そして、そこで得られた知見を社会に向かって情報発信をしていくことが必要であると認識している現状である。心理臨床の道は、まだまだ果てしなく続き、遠いのであり、臨床実践指導者養成の道は、ようやく緒についた程度であろう。これも大きな課題ではあり、千里の道も一歩からである。

* * * * *

以上、『私の心理臨床の土壌』（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・心理発達相談室紀要；第18巻・巻頭論文）で、私の幼少期から青年期・中期の高校時代を語る、と本稿『心理臨床の道』第Ⅰ部：心理臨床への歩み—大学・学部から大学院時代までを語る—、第Ⅱ部：心理臨床への道—職業生活時代を語る—（名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要—心理発達科学科—第49巻）で、私の『心理臨床の道』を語ってきた。

振り返って見れば、それは“艱難辛苦”の道でもあり、

また同時に“感激・感動・感謝”の道でもあった。私は、以前に会っていたクライアントが長年のカウンセリングを終結するに当たり「今の自分の心境は、日本画家・東山魁夷（ひがしやま かいい）の“道”のようです。」と語ったことを思い出す。平成4年（1992年）秋に長野市の信州大学教育学部で日本教育心理学会第34回総会が開催された折に、かの長野県立『東山魁夷美術館』を訪ね、下絵図とともに完成した絵の前に立って、感動したことを思い出す。今、私はその『道』と同じような心境である。

27有余年の永年にわたって、お世話になった名古屋大学に深甚のお礼と感謝の意を表したい。これを節目にさらに心理臨床の道を歩むことになるが、今後とも皆様のご支援と励ましを期待して閉じることとする。私は地道にさらに千里の“心理臨床の道”を歩みたい。

さようなら。

<終わり>